

---

# 月の掟と共に

深山 姫鈴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月の掟と共に

### 【Nコード】

N3146W

### 【作者名】

深山 姫鈴

### 【あらすじ】

遙か数千年も昔。この世界にはまだ妖精族や竜神族が存在した。そんな中、人間界に生きるクロアは、長老からある仕事を頼まれる。

それがきっかけで、主人公は人間族の間で伝説とされる竜神族の少女と出会う。そして、その少女と幼馴染と共に別の世界を冒険する事に。

三人の少年少女が闇に立ち向かう、異世界冒険ファンタジー、ここに開幕！

眩しいくらいの朝日が、東の空より顔を出す頃。

一人の少女は、朝靄の立ち込める森の中を必死に駆けていた。

今、進んでいる場所は決して道とは呼べない場所。そのため、足場が悪い上に靄のせいで、視界も決して良いと言えない。少しでも判断が遅れたら、目の前に現れた木の幹や、地面から顔を出す石に足を取られてしまう。

そんな彼女の体には擦り傷や切り傷、さらに鋭利な刃物で斬られた傷がある。その証拠に、身につける黒いローブもボロボロで銀色に輝く髪も、土埃などでくすみがかっている。

この最悪な状況で、地面から出た根や石に足を取られたりしたら、かなりの激痛が襲う。そうなってしまうえば、背後から迫りくる敵に捕まってしまうと簡単に予想がつく。

なぜ、私が追われなきゃいけないの？ どうして誰も助けてくれないの？

彼女の脳裏に過る、いくつもの疑問。そして、「あの人達は同族じゃない！」という確信。

今まで会ったことも見たことない種族。理由もわからずに迫る追手。さらには、見慣れない土地。

という三重の恐怖に、薄桃色の双眸から零れんばかりの涙が溢れる。

「……そっちだ……！ ……何をしている……早く捕まえろ……！」

と、遙か後方で男性の鋭い声が誰かに命令を下す。同時に、複数の足音が彼女の方に接近する。その声に彼女は体をびくつかせながら後ろを向く。多少スピードが落ちるが、なんとか走った状態を維持し続ける。

自分が今いる場所がばれた。早く逃げないと、殺されてしま

う！

目尻に溜まった涙を流しつつ、彼女は即座に思うと前に向き直る。限界の近づく体を無理やり行使して走り続ける。が、不意に片足の爪先に硬いものがあたり、彼女は前のめりに倒れてしまう。

目の前に広がる木々と靄から、焦げ茶色の根と緑豊かな地面へと目まぐるしく景色が変わる。

「……うつ！」

なんとか受け身を取ったが、全身に凄まじい痛みが走る。それを堪えようと、自身の体を抱きしめる。

しかしその行為は空しく、一行に痛みが引かない。しかも、倒れた拍子に口の中を切ったのか、口内に鉄の味が広がった。

背後から迫る追手は、そんな彼女を気づかうことなく確実に距離を詰めてくる。

遠のきかける意識を無理やり引き戻す。打撲や打ち身で痛みの増した体を起こす。

「氷から生れし竜の戦士達よ。我が魔力、我が詠唱に応え、この身を守りたまえ……！」

地面に両手をついたまま、彼女は素早く詠唱を行う。途端、周囲の三箇所地面から水が溢れ出る。それらは、徐々に人の形を象る少女と同じくらいの背丈と手足。人と比べ三倍近く長い首。握られた刃先の短い武器とプレートに似た防具。

それらの形成が終わると水の塊は瞬時に凝固し、水色の鱗を持つ小柄な竜へと変わる。彼らの体には銀のレザーマーが身に着けられ、手には短刀が握られていた。

「お願い。私を、安全な場所まで……っ……！」

連れて逃げて、と彼女は続けようとした。が、直前に右肩に鋭い痛みが走る。新たに傷を受けた個所を手で押さえ、目の前の地面に視線を向ける。

そこには、くすみがかった銀の鍔をつけた矢がある。

彼女は肩を押さえたまま首を動かし、矢が飛んできた方向を横目

で見る。その視界に、自身の召喚獣と同じ防具で身を固めた男性を捉えた。

片手には先ほど使った弓がある。しかし、それが上手く命中しなかったこと知り、それを足元に捨てる。代わりに腰にさげた剣を鞘から抜く。そして、口に咥えた笛のようなものに息を吹き込む。途端に、

ピーーーーーーッ!!

という鋭い音が周囲に響いた。

刹那、少女の召喚獣達は動いた。一匹は主人を守り、残りの二匹は彼女に傷を負わせた追手に襲い掛かる。

結果、二匹は巧みなコンビネーションで追手の一人を追いつめ、敵の首を切り落とすことに成功した。

これで一段落かと思いきや、周辺に散らばっていた追手の仲間がすでに草木を掻き分けて、こちらへ接近している。笛の音を聞きつけたのだ。

少女の守りをしていた召喚獣は敏感に反応し、すぐに傷ついた主を抱き上げる。と、両脇に控える仲間と、朝靄が立ち込める森の奥へ姿を消した。

青く澄み切った空に、綿菓子のような雲がゆっくりと流れるお昼時。

一人の少年は、雑草の生えた小さな丘に寝そべっていた。

彼の名は、クロア。ここから少し離れたゴードラ村に住む少年である。歳は、昨日で十七を迎えたばかり。そして、剣と魔法の両方を極める類まれな人材でもある。

両親は彼が三つの時に、村に入り込んだ賊に殺された。その時の記憶は、あまり覚えていない。きっと、その光景が脳裏に焼きつくより前に、多大な恐怖心がそれを記録することを拒絶したのだと思う。

だからと言って、悲劇のヒーローや柄の悪い人間を気取るつもりは、今の所皆無だ。

と考えつつ、その場でクロアは伸びをする。

ああ、眠い……。

柔らかい草のお陰で、じわじわと眠気がやって来る。それを手助けするかの如く心地よい風が吹く。銀色に輝くやや長めの髪が僅かに揺れる。

そんな眠気に負けじと、クロアは視界いっぱい広がる青空を再び眺めた。

今日の天気は、気持ちいいくらいの快晴。雲一つない。こういう時にこそ、ここにきてのんびりするのに限る。それに などと考えていると、遠くの方から誰かの足音が聞こえてきた。

どうやら、ここに自分がいることがバレたらしい。

それを証明するかのように、クロアと同じ年くらい少女が「やっ」と見つけた」と言う表情で頭上から覗き込んだ。

肩甲骨まである桃色の髪に、黄色の瞳が印象的な少女である。服装はゾラという布地で作られた薄茶色の長袖シャツに焦げ茶色のジ

レー。さらに胴着と同色のロングスカートを身につけている。

そんな彼女の額にうつすらと汗を掻いており、自分を探すのに必死になっていたことが理解出来た。

「もうっ。どこに行っただかと思えば、こんな所にいたのね。おかげで探すのに苦労しちゃった」

どこか嬉しそうに言葉を発したリリンは、休憩だと言わんばかりに、そのままクロアの頭上に座した。そして、目の前に広がる草原を眺め始めたのである。

「って、リリン。そんなことしていいの？ また何か、頼まれことでもされたんでしょ？」

「え？ ああ、そういういえばそうね。たしか、長老様がクロアのことを呼んでいたわ」

その行動に心配に思ったクロアは、頭上にいる彼女を見上げてそんな質問を投げかける。と、彼女は視線を下に落とし、のんびりとした口調で答える。

少し気が遠くなる気がした。

「そ、そう言うことは、もっと早く言おうよ」

ぱつと半身を起したクロアは、苦笑しながらも彼女に突っ込みを入れる。

「ごめんね、クロア。次から気をつけるよ」

と、リリンは起き上がったクロアに謝る。その後再び目の前の草原に視線を向けた。

大丈夫か、おい。

リリンとは、幼いころから交友関係を持っているが、このマイペースさは未だに治っていないらしい。

幼馴染であるクロアでも時節、彼女が何を考えているのか全く理解できない。それはこちらとしては非常に困る。

いや、正直に言うと、なおして欲しい。でないと、自身はともかく、それ以外の人から反感を買ってしてしまう恐れがある。

そんなことを考えつつもクロアは立ちあがり、リリンの隣で来た

道を眺める。

遠くの方には、自分達が住むゴードラ村が小さく見えた。その場で深呼吸した後、クロアはまだ柔らかな草の上に座るリリンに目を向けた。

自分を探すのに体力を使ったのか、うとうとし始めている。

「それじゃあ、リリン。俺は、先に村に戻ってるよ」

と言に残し、クロアは足早に村に戻っていく。が、動き出してから五メートルも行かない内に、リリンに名前を呼ばれた。いや、正確には叫び声に近いもので。

振り返った先には、今にも泣き出しそうな顔つきをしたリリンが、自分の後を追ってくる頃だった。

彼女のことだ。深い眠りから覚めた時に、クロアがいないことを考えたのであろう。

「私を置いて行くなんて、ずるいよ!」

一足先に村へ戻ろうとした彼に追いつくと、少し機嫌を損ねたりリリンはそう抗議する。

それを見ておかしく思ったクロアは、クスツと笑って謝り彼女と村に帰った。

ゴードラ村は、コードボルト王国東部に位置する人口五十人と少しかなる村だ。気候による寒暖差があり、農作業の他にクルグという果実のなる木を育てることもできる。その上、月に一度は必ず国内の街や村を点々とする商人の一団が訪れる。後は、住人の誰もが気さくで、親しく接してくれる良い人ばかりである。

そんな村をクロアとリリンは歩き、その中心に位置する長老様の屋敷に到着した。といっても、家の造りは普通のそれと大差ない。

違いを挙げるとすれば、玄関扉の両端の壁にキーマの花で作った冠が掛けているのと、部屋数が少し多いくらいだ。

「着いたね。長老様のお屋敷」



と、玄関前に立つクロアの隣で、リリンはゆったりとした表情と口調で言葉を発する。その様子からして、緊張の欠片も見当たらない。

少し面倒くさがりやなクロアでも、やや強張った面持ちで扉の前に立っている。それにもかかわらず、リリンはいつもと変わらない態度なのだ。

クロアが思うに、リリンはきっと緊張という感覚が抜け落ちているのだ。根拠は無いけれど。

そんな彼女の言葉に、ぎこちない笑顔で頷いた後、深呼吸をしてから目の前にある扉をノックする。

木造の扉が乾いた音をたて長老の部屋に響く。が、音はそれっきりで誰も応答が無く、ただ時間だけが過ぎていく。

玄関先で待つこと数分。隣で大人しくしていたリリンが、耐えきれず口を開いた。

「ねえ、クロア。もう、長老様のお屋敷に入らない？ 私、そろそろ疲れてきちゃった」

それはさすがにまずいだろう、とクロアは内心で思ったが、そう言う自分もそろそろ待っていることに、疲労を感じ始めているのも確かである。

結果、クロア達は長老の屋敷に勝手に入ることに決まった。

「……失礼、します……」

ドアノブを握り、静かな口調で入室の言葉を述べた。と同時に、クロアは部屋の様子を伺いながら、そつと扉を開ける。瞬間、部屋内部から香水の独特の匂いが、遠慮なしに溢れ出てきた。

その匂いが苦手なクロアは、大いに顔をしかめて屋敷の中に足を踏み入れる。

入ってきた所は、長老が一日の大半を過ごす場所だ。部屋の端には天井まである本棚があり、そこに複数の香水と年季のある分厚い本が並べられていた。

奥には、彼がいつも使用している机と椅子。その前に二人掛けのソファがある。さらに、その両脇には隣の部屋に続く扉もあった。誰もいない見慣れた部屋を観察しつつ、クロア達はソファに腰掛けた。その途端、右端にある扉の奥から鈴の音が二度鳴った。

それにクロアは眉をひそめるとその扉が開き、中から深緑のローブを着た老人が姿を見せる。

彼こそがゴードラ村の長老で、現役の魔法使いでもある人だ。ちなみに、この村で魔法が使えるのは、この部屋にいるクロアとリリ

ンを含めた三人だけだ。

「今回は、来るのが遅かったようじゃな。クロアや」

片手に等身大の杖を持つ彼は、ローブの裾を引きずりながら木製の椅子に座る。

「つて、自分が呼び出したくせに、その言い方は無いんじゃないんですか？ 長老」

と、落ち着いた口調で話しかける彼に、クロアは静かに反論する。隣に座るリリンも頷き、その意見に同意を示す。

「……はて。扉には、ノックをすれば勝手に開くように魔法をかけたはずじゃが？」

と、長老は訝しい顔つきで顎に片手を当て独白のように述べる。どうやら、扉が勝手に開かなかった原因は、そういう施しをした本人にも分からないらしい。それはそれで腹立たしいが。

その様子を見て、クロアは一つ思い至った。

「それって、今回の呼び出しと何か関係があるとか？」

そうクロアが問いかけると、意外にもすぐに答えが返ってきた。

「いやいや、それはない。魔力切れか何かじゃろう。して、お主に少し頼みたいことがあつてな。ところで」

と、ここで言葉を切り、長老はリリンに皺の多い顔を向ける。これには彼女も不思議に思ったのか、小首を傾げて彼を見やる。

「クロアを呼んでくれ、と頼みはしたが、お主まで入ってくることはなかるう？」

冷やかにも感じられる声音で、彼はリリンに向かって言葉をかける。

「えっ。……あ、ごめんなさい。それじゃあ私は、外で待ってます」  
まだ疲れが残っているのだろう。リリンは、先ほどより少し元気のない表情で立ちあがって謝る。その後、長老に向って軽く頭を下げて足早に部屋をでた。

「さて。これで、ゆつくりと話ができるな。のう？ クロアや」  
今しがた外に出て行ったリリンの方を見つつも、村の長はそんな

言葉を洩らす。

「いや。どのみち、リリンには席を外させるつもり、だったんでしよう?」

「まあ、そうすることは、確かじゃったな」

と、クロアの問いに頷いて述べると、軽く咳払いをして長老は言葉が続ける。

「今回、お主を呼んだのは、お主に、とある場所を見に行ってきた欲しいからじゃ」

それがここじゃ、と机にあった本を渡される。そこには「ティモールの森」と書かれていた。

「ティモールの森? なんてまた、そんな所に?」

ティモールの森は、この村から北に数キロ離れた場所に位置し、十数キロにも及ぶ巨大な森林地帯である。周辺の村では「精霊達の育む森」として有名であり、正確なことはクロアでもわからないが、年間約一メートルずつ草木を広げているそうだ。

「王都に住む古い友人から届いた手紙にあったんじゃが、レザーマーの右胸に赤き竜の文様を彫り込んだ連中が、竜神族の少女を追ってその森に入り込んだそうじゃ」

先ほどとは打って変わって、長老は真剣かつ慎重な口調で述べる。が、その言葉の中でクロアは、一つ引つかかるものがある。

人間族の中には、伝説とされる竜神族を殺すことを生業にする集団がいる、と先月に訪れた商人も話していた。

そんな集団が、存在するわけがない。

クロアは頭ごなしに否定して、長老の言葉を要約する。

「つまり、今から俺が、その森に行つて、真偽を確かめて来いってことですか?」

「簡単に言えば、そのようになるな」

「……わかりました。それじゃあ、身なりを整えたら、すぐに出発しますね」

そう言うと同時にクロアは立ち上がり、玄関扉の方に向かう。そ

して、ドアノブに手をかけた途端、長老に呼び止められた。

振り返った先には、こちらを心配そうに見る長老の姿がある。

「もしもの時の為に、剣を持っていくのも忘れぬようにな」

一瞬、何をそんなに心配しているんだ？ と、クロアは不思議に

思ったが、素直に「わかりました」と言葉を返した。

外に出ると、少し冷たさを残す風がクロアを迎えてくれる。斜め前には、柱を背もたれにして村を眺めるリリンがいる。が、今はその行為を止め、親しげな眼差しで自身を捕らえていた。

「クロア、おかえり。長老様との話は、どうだった？」

と、彼女はクロアの前に来るなり、そんなことを聞いてくる。

彼女は彼女なりに、先ほどの内容が気になるらしい。

「別に、たいしたことじゃないよ。少し、ティモールの森の様子を見に入ってきてくれて言うお話」

と、先ほどの話を手短に伝えたら、何を思ったのか彼女は親しげな表情から悲しげなものへと変わる。

「最近、多いよ。そういうこと」

いや、長老からの頼みごとなんて滅多にないから！

と、クロアは内心で反論してみる。

しかし、ここ最近、リリンと会話する機会も少しずつ減っているのは確かだ。

「大丈夫だよ、リリン。夕食までには、帰って来れそうだから」

その様子を見かねたクロアは、片手をリリンの頭上に置き、桃色の髪を梳くように撫でる。と、彼女は探るような目つきで、クロアを捉えたが

「……わかった。それじゃ、なるべく早く帰ってきてね」

しばらく考えた後、彼女は「絶対だよ」と言いながら納得してくれた。

その時、リリンは一体何を思ったのか、それが少し気になった。

いくつもの魔力の波動を感じる……。

好き放題に伸び広がる草木を前に、クロアはそう思った。

長老が言う通りかは不明だが、聖なる森に何者かが入り込んだのは確かである。

おかげで、活発的な小動物達の鳴き声が聞こえない。その上、ピリピリとした空気が森の奥から溢れてくる。

これは、明らかに森の中で何かがあつた証拠だろう。

「……さて、魔力の詳しい位置でも探ってみますか」

静かにぼやいたあと、クロアは目を閉じて意識を集中させる。と、自然に周囲の音が遠ざかり、暗闇とほぼ無音の世界だけが広がる。

そこに、魔力の色を示す水色に近い色の球が一つ、二つ、三つ……と増えていく。

魔力の数は、全部で九つ。その中で、比較的大きな魔力を持つ者は二人。四つのグループと五つのグループに一人ずついる。おそらくその両者はリーダー格に値するだろう。

現在、動いているのは後者だ。前者の方はその場からほとんど動かず、時折、周囲を警戒する素振りを見せるだけだ。

あまり長い時間、この場で動かずにいるのも躊躇われ、そこでクロアは目を開ける。

途端に、周囲の光に目が眩む。クロアは瞬きをしてそれに慣れるなり、何の躊躇いもなしに動き出す。目指す先は、もちろん前者の方である。

ティモールの森に入って最初に感じたのは、外より光が少ないということ。そして、足元が非常に不安定であることだ。

普段こんな道を歩いたことのないため、非常に厄介である。個人的な都合で言うと、後者に先を越されるのは、少し面倒である。

そんなことが脳裏に過る。慣れない道に苦戦しつつ、クロアはできるだけ足を速めた。

しばらくの間、木々の間をすり抜けて道なき道を進むと、急に視

界が急に開けた。

出てきたのは、小さな広場となる場所だ。数メートル先には、直径十メートル程の湖がある。その水は透明度が高く、見たこともない魚が何匹か泳いでいる。

思わずそれに見入っていると、冬でもないのに冷たい空気が左手に触れた。

それにはっと我に返ったクロアは、寒気がやってきた方に体を向けて身構える。が、その先の光景に思わず目を見開く。

「氷の、召喚獣……！？」

見間違えようがなかった。冷気を漂わせる、武装した三匹の竜がそこにいるのだ。

しかも、鋭い目つきでこちらを伺っている。その様子からして、かなりクロアを警戒しているがわかる。

などと召喚獣達を観察していると、その背後で何かが僅かに動いた。すぐに、そこに目を落とすと、黒いローブを身に纏った少女が横たわっていた。

良く見れば、体のあちこちに擦り傷や切り傷があり出血もしている。

危険な状態だと判断したクロアは、少女の手当てに向かおうと地面を蹴る。が、数メートルも行かぬ内に、召喚獣の一体が威嚇の声を上げて行く手を阻む。

残りの召喚獣も、彼に習って威嚇をしながら、その背後に立っている。

「……くっ。そう簡単にはいかないか」

彼らの威嚇を諸共せずクロアは独白すると、両手を交差させた。刹那、彼らは動いた。

先ほどの動きとは違い、切れのある動きでクロアの間合いに飛び込み、持っていた剣で斬りかかってくる。

「止めてっ……！」

もうだめだ！ と思った瞬間、召喚獣の背後から少女の叫び声が



聞こえた。それに召喚獣達は応え、それぞれの剣をクロアの喉元ギリギリで止める。

数秒後、その切っ先は引かれた。

無意識の内に止めていた呼吸を再開させ、クロアは召喚獣の様子を窺う。見た所、今の彼らには戦闘の意志は無いように見える。

それを確かめてから、すぐさまクロアはお腹を抱えて蹲る少女に駆け寄る。

「君、大丈夫？」

彼女の脇でクロアは片膝をついてしゃがむと、できるだけ優しい声音で声をかけた。

「……ち、近づか、ない、で……」

と、少女は苦痛に歪んだ表情でクロアを見上げ、拒絶の言葉を発する。が、肉体的に限界が近いようで、動くこともままならない。

「目の前に、傷だらけの子がいたら、助けられずにはいられないよ」  
そう言い、クロアは両手を広げて少女の体の上に手をかざす。続けて、低い声で治療魔法を唱え、かざした両手に魔力を集める。

瞬間、魔力独特の淡い青色のオーラを手に纏う。彼女の体にできた傷を治していく。

それにあわせて、彼女は目を閉じる。怯えているのか、体は小刻みに震えていた。それとは裏腹に、クロアに対する警戒心が薄れているような気もする。

現に彼女の体の震えは、いくつもの傷が癒えるにつれて治まっている。

最初、クロアは彼女に拒絶されると思っていた。それは、彼女が人間族の間で伝説とされる竜神族ではないだろうかという予測もされる。まあ、それは少なくとも後で分かるだろう事実のはずだ。

やがて少女の体にできた傷は癒え、それを確認したクロアは、彼女の上にかざした両手を引く。

その行動で察しがついたのか、ゆつくりと少女は目を開け、自身の体を確認する。直後、全ての傷が治ったことを理解した彼女は、申し訳なさそうな顔つきでクロアを見る。

「……あ、ありがと……」

と、控えめな様子で彼女はお礼を述べた。その声音には、クロアに対する警戒心は薄れていた。

「どういたしまして。君も」

「そこで、何をしているのだね？ 少年」

不意に掛けられた声に反応し、クロアは驚いて後ろを振り返る。

その先には、レザーアーマーに身を包んだ人物達がいた。それぞれの右胸には、赤い竜の文様が彫り込まれている。

長老の証言とも大方一致し、この森に入る前にクロアが調べた後

者のグループでもある。先頭には、鞘から長剣を抜いた男性が立ち、その足元には少女の召喚獣が倒れていた。すでに戦闘不能となっている。

「あんたらこそ、そこで何しているんだ？」

すつと目を細め、クロアは中心の男性に質問で返す。と同時に、ここから逃げる事が可能な策を考える。

「ほお。質問を質問で返すかね。ならば、少し聞き方を変えよう。ここに転がる、弱小な召喚獣を呼び出したのは、少年か？」

「そうだ、と言ったら？」

「ここで潔く死んでもらう。そのの、竜神族の少女と共になっ！」

そう言われた瞬間、背後にいる少女の息を飲む声が聞こえた。クロアは片膝を地面につけた状態のまま、背後に視線を向ける。

そこには、今にも泣き出しそうな顔つきで、こちらを見る彼女と目があつた。

「君が竜神族って、本当かい？」

穏やかな表情と声音を使い、クロアは彼女に問いかける。と彼女は顔を俯かせ、か細い声で「ごめんなさい」と謝る。

その言葉だけでも聞けたら、クロアにとっては十分だった。

「さあ、おしゃべりの時間はお終いだ。何も聞かず死んでくれるな？ 少年」

手に持つ剣を前に構え、彼は何の感情も籠らぬ声音で聞く。

それを合図に、後ろで控えていた彼の部下達は、腰に下げた長剣を一斉に鞘から抜く。ざらり、と周囲の光に反射して白銀のそれが光る。

「はあ。結局、考え中だった逃走策はおじゃん、か……」

目を閉じてため息をついたクロアは独白し、ゆつくりと立ち上がる。そして、両手を交差させ、魔力を込める。淡い青色のオーラが両の手を包み込む。

その行為は、相手に対する明らかな拒絶。つまり、こんな所で俺達は死にはしない、という意志の表れだ。

「少しは、理解してくれよ。少年」

彼は独白のように言う。刹那、その顔から感情という感情が消え

「殺せ」

喜怒哀楽の欠けた低い声音で、命は下された。同時に、彼の背後にいる部下達はクロアに向かって殺到する。

それを見た少女は、逃げるようにクロアに叫ぶ。が、今の所クロアは彼女の言葉に従う気は無い。

「剣よ、我が手に！」

やや低めの声で呪文を唱え、クロアは体制を低くして走り出す。最初の方からトップスピードに近いものだ。

そのため、あっという間に両者の攻撃圏内に入る。身を低くしたまま、自分の両手に呼び出したクロアの剣が相手を襲う。

キイイーン！

ガガッ！

という二つの音が、剣を交えた両者の間に響く。

相手は、一点に集中して剣を振り下ろすが、そこにはクロアの姿はない。あるとすれば、彼が移動した時の薄っすらと残像が残ったくらいだ。

多分、それくらいしか彼らには理解できなかっただろう。

その一瞬後に彼らは、胸元あたりから鮮血を迸らせて地に伏した。持っていた剣も、今では刀身の真ん中が綺麗に真二つになって地面に転がっている。

それを見届けてから、クロアは彼らを背に二つの剣を一振りし、付着した血のりを払い落とす。刀身には、蒼い魔力のオーラが纏う。「……ま、魔法剣、だと？ 貴様っ、そんなものを使って、許されると思うのか！？」

「ああ、思っさ。だから、使っている」

先ほどの冷静な態度はどこに行ったのだろうか、と思うくらいの変わりようである。相手が思わず後ずさりするくらいなのだから、心底驚いているに違いない。

そう。クロアの扱う武器は、膨大な魔力を刀身に宿す剣　つまり、魔法剣（しかも、二刀流！）である。それらを地面に突き刺して、クロアは口を開く。

「だが、安心しろ。あんただけは、俺の魔法で、息の根を止めてやる」

瞬間、彼の顔が青ざめる。

冷静な所がある分、彼は強いという印象を持っていた。が、それは単なるクロアの思いすごしだったようだ。

「こ、今回は、俺が悪かった。だから、この命だけは……！」  
などと命乞いを始める始末。これは呆れを通り越して、一介の兵士として恥ずべきことである。

「今回は？ 許すわけないだろうっ。か弱い少女を襲うような人間を、俺は許す気になれない！」

彼の姿に怒りを覚え、クロアはそう言い放つ。徐に片方の腕を持ち上げ、掌を相手に向ける。空いた、もう片方の手をその腕に添え青い魔力のオーラを纏わせる。

その間に、相手は血相を変えてクロアに背を向けて、走り出そうとしていた。

「遅いよ」

その一言で、全ては終わった。今にも逃げ出す、名も知らぬ兵士は周囲の空間と共に見事な氷の塊と化した。

クロアの放ったものは、氷属性の魔法の一つで、氷の結晶化  
ブリザード  
という高等呪文だ。

今回は魔法名や呪文詠唱を破棄したが、そこにその二つを加えれば、大量の魔力を消費する代わりに広範囲の敵を氷漬けにすることができる。

しかし、今のクロアにとってさっきの魔法で魔力が底を尽きかけていた。

魔法剣を呼びだす呪文に、高等呪文を一回。その片方だけでも、大半の魔力を持っていかれてしまう。にもかかわらず、なんとか倒

れずにいられるのは、クロア自身も少し驚きを隠せない。

あまり、難易度の高い魔法を一度に使わない方がいいな。これは。

と、秘かに心の中で呟く。直後、クロアは疲労の溜まった体で周囲を見渡す。

これで、おおかた少女に危害を加えそうな人物は、もうこの森にいないであろう。魔力の気配も、自分と背後にいる少女のそれ以外を感じることはない。

「……あ、あの」

これで一安心だな、と思った時、背後から遠慮しがちな少女の声が聞こえてきた。振り返ると、そこには胸元に片手をあて上目遣いに自分を見る少女がいた。

立った状態で見るのは初めてだが、彼女の身長はクロアより拳二つ分くらい低い。

「ん？ どうした？」

「……こ、この度は、他種族である私を助けてくださり、ありがとうございました。……あの、よろしければ、あなたのお名前をお聞かせくださいませんか？」

そう聞かれたクロアは、素直に目の前の少女に自分の名前を告げようと口を開く。その時、急に彼の視界が大きく揺らいだ。そのまま、危うく背後に倒れかかる。

が、すぐクロアの異変に気がついた少女は素早く二の腕を掴むなり、一緒にしゃがみ込んだ。

「う、ごめんなさい。だ、大丈夫ですか？」

彼女は心配そうに問いかけ、クロアの顔を覗き込んだ。

すでに彼女の目が涙で潤んでいて、今にも泣き出しそうである。

「……う、うん。大丈夫。ちょっと、魔力を使い過ぎただけだからそうクロアが答えると、少女は何を思ったのか自身の顔を近づける。そして、彼の頬に軽く自分の唇をあてる。

柔らかく、艶かしい感じがした。

すぐに頬から唇が離されたが、思いのよらない彼女の行動にクロアは言葉を失ってしまう。

「……あ、あの、これはその、わ、私の種族に、つ、伝わる、おまじないの、ようなもので、か、かなりの、魔力を消費した方に、すすめるのです」

と少女は頬を朱に染め、言葉を詰まらせながら弁明する。

その姿を見て、不思議と可愛らしく思えたクロアは、彼女の頭上に片手を置く。途端、彼女は顔を赤くしたまま体を強張らせ、ギョツと両目を瞑る。

「ありがとう。心配してくれて」

クロアは彼女にお礼を言うと、そのまま彼女の銀髪を梳くように撫でる。

その行為に少女は驚いたように目を開ける。が、次第にその目は申し訳なさそうに伏せられる。

「……いえ。本当にお礼を言わなければならないのは、こちらの方です。この傷だらけな体を治療し、さらには、この命までも助けていただきました。それなのに私は、あなたに対して、まだ何もできていない」

ああ。だからこの子は、何の手助けもできない自分を責めているのか。

クロアにとって、何かの見返りを求めてした行為じゃないのは確かである。が、それが時として自分が思ってもいない方向へ進む場合もある。

「自分を責めないで」

「……え？」

その言葉が上手く聞き取れなかったのか、少女は顔を上げて聞かえす。目尻には涙が溜まり、今にも零れ落ちそうだ。

「そんなに自分を責めないで。見ているこっちまで、辛くなるだろう？」

「けど、私は何か……っ！」



納得がいけないのか、新たに言い募ろうとする彼女の頬を、クロアは両手で包んで黙らせる。

「俺はただ、目の前で傷ついている子を見たくはない。だからといって、目を瞑ることだけは、絶対にしたくない。人を助けるのに、それ以外の理由は、いらないと思うけど？」

と言い、クロアは触れた彼女の両頬を撫でる。

そうするにつれ、ついに観念したのか、少女は静かに息を吐いて頷いてくれた。その拍子に、目じりに溜まる涙が頬を伝い、クロアの指にかかる。

「……あの、私は竜神族のサーラと言います。あなたの名前を、聞かせください」

自身の頬を撫でる手に触れて、竜神族の少女ことサーラは涙を流しなら述べた。

「人間族のクロアだ。よろしくな、サーラ」

と、邪気のない笑顔で、クロアは自己紹介を行う。その手にはサーラの温もりがまだ残っていた。

深い黒に堂々たる面持ちで丸い月が東の空より顔を出した頃。クロアは、ティモールの森で出会ったサーラと共に、ゴードラ村に戻ってきた。

夜になると昼間と違って気温が下がり、肌寒くなっている。こんな時間まで外出しているのは、おそらくクロア達くらいしかないだろう。

早く家に帰って食事を取りたいのも山々だが、その前に長老様への報告がある。

幼馴染のリリンは帰りが遅いクロアのこともあり、すごく機嫌を悪くしているだろう。できるなら、その怒りをぶつけられることだけは避けたい。

「……あの、クロアさん」

「ん？ どうした？」

と、隣に立っているサーラがクロアの名を呼び、彼の服の腕部分を軽く引つ張る。

それに対して、クロアは彼女に視線を向けて問いかける。と、彼女は頬を朱に染めて恥ずかしそうに顔を俯かせる。

その姿に訝しく思ったクロアは彼女の様子を伺うと、やっと心の準備ができたのか、さっと顔を上げる。まだ頬が赤いが。

「あの、クロアさんの家に、ローブってありますか？」

「え？ あるにはあるけど」

何に使うの？ と聞く前に、クロアは彼女の服の状態に気がついた。

今のサーラの服は、黒いローブで身を包んでいる。が、ティモールの森で謎の兵士達に剣で斬られたりして、肩や脇腹などといった

箇所服が破れていた。

「あ、ごめん。その恰好じゃ寒いし、辛いよね」

そのせいで、さつきから寒そうに腕をさすったりしていたわけか。我ながら、気の利かないことをした。

と、クロアは内心で己を責める。

「いえ。こちらこそ、ごめんなさい。……あの、ご迷惑でなければ、着る物を貸してもらえませんか？」

さつと顔を上げてクロアを見たサーラは、申し訳ない気持ちを顔全体に出して頼む。

「うん、構わないよ。それに、泊まる所も考えないとね」

快く頷いた後、クロアはサーラの手を握り自宅方面に向かって歩き出す。

クロアの家は、村の中央に位置する長老様の屋敷から少し西に行った所にある、やや小さめの建物だ。部屋は台所付きの居間と風呂場の二つしかないが、一人で暮らすには十分である。

「ねえ、サーラ」

自宅の前に立ったクロアは、ふとあることを思い出し、隣にいるサーラに声を掛ける。

「何ですか？」

彼女はクロアに視線を向けて聞くと、可愛らしく小首を傾げてみせた。

「服を貸すのはいいけど、どんな色がいいとかある？」

と、何気なしにクロアは、そんなことをサーラに問いかける。

「もし良ければ、これと同じものがあれば、お願いします」

彼女は、自分のボロボロになった黒いローブの胸元を指さして答える。と、不意にサーラの体がふらついた。

すぐさま、クロアは彼女の両腕を掴み、そのままの状態でしゃがみ込む。

「……サーラ、大丈夫？」

クロアは彼女の体を支えたまま、一抹の不安を抱えて覗き込む。そこには、肉体的疲労を訴えるサーラの顔があった。

「……ご、ごめんなさい。クロアさん。ちょっと、無理してたみたい。服を着替えたら、少し、眠らせて」

ゆつくりと彼女は顔を上げて、謝罪の言葉と共にそう告げる。と、彼女は眠りに落ちる。全身に廻っていた力が緩む。

その様子にクロアは苦笑すると、彼女の両肩と両足の膝裏辺りに手を回して（いわゆる、お姫様抱っこ）抱き上げる。

そして、その安らかな寝顔を一瞥したクロアは目の前にある扉を開けた。

部屋に入ると、少し埃っぽい臭いがした。が、そんなことを気にすることなく、クロアはサーラを抱いてその奥へと進んでいく。

そして、最奥にあるベッドへ深い眠りについたサーラを寝かせる。「悪いけど、もう少し、そのまま置いてね」

多分聞こえていないであろう彼女に向けて、クロアは声を掛けると再び月光の当たる外に出た。向かう先は長老の屋敷である。

少し歩くと、目的の場所が視界に入ってきた。

そこまでは問題ないが、屋敷の前には予想通り幼馴染の姿があった。彼女もクロアが来たことに気がついたのだろう。

クロアの姿を確認するなり、駆け足でやってくる。しかも、ものすごく不機嫌な顔つきで。

「もうっ。クロアの嘘つき！　どういうことよ、こんな時間になるまで帰ってこないなんてっ！」

案の定、幼馴染のリリンは怒っていた。しかも、「ものすごく」がつくほど機嫌が悪い。やはり、これだけは避けて通れなかったようだ。

「ごめん、リリン。悪気はなかったんだ」

とクロアは謝るが、目の前にいるリリンはそれを許してくれないらしい。

こうなったりリンを落ち着かせるのは、付き合いの長いクロアでも至難の業だ。そんな彼女の対処に困っていると、聞き慣れた声が屋敷の方から聞こえてきた。

それが聞こえた方へクロア達が顔を向ければ、深緑のローブを着た長老が屋敷の前に立っていた。

「リリンや。いつまでも、そう不機嫌でいるでない。クロアが困っているじやろう」

二人のいる場所まで歩み寄った長老は、視線をリリンに向けて言葉を発する。その顔には困り果てた表情があった。

「……だって、久しぶりにクロアと一緒に夕食、食べたかったのよ。まさか、こんなに遅くなるなんて思ってたんだもん」

リリンは肩と視線を下に落とし、彼女は悲しげな口調で言う。

彼女も心のどこかでは寂しいと感じていたのだらう、と、複雑な思いを抱きながらもクロアは考える。

「まあ、こうなったのは、一応、わしの責任でもある。許してやってくれ」

そう述べた後、長老は彼女から視線を外し、今度はクロアの方に視線を向ける。先ほどとは一変して、彼の表情は真剣な面持ちになっている。

「さて、クロアや。この度の調査、ご苦労じゃった。して、確認のために聞いておくが、このような時間に帰ってきた、ということは、あの手紙の内容は真であった、ということに違いないのじゃな？」

という長老の問いかけに、クロアは「間違いありません」と頷く。そしてそのまま、ティモールの森でサーラを助け、現在、彼の家で眠っているということも伝えた。

「そういうことで、リリン。ちょっと、お願いがあるんだけど」

あらかた長老に報告し終えたクロアは、自分達に背を向けて夜空を見上げる彼女に声をかける。

「……え？ 私に、お願い？」

くるつと半身を捻って、クロアの方に顔を向けるリリンは不思議そうに聞き返す。

その面持ちにはクロアに対する怒りの色は失せ、代わりに、のほ

ほんとした表情があった。

さっきの不機嫌さは、どこにいったのだろう、と不思議に思っくらしいの気の変わりようである。その様子に、クロアと長老は軽く頭痛を覚えたのは言うまでもない。

ふと目が覚めたサーラは、まだ眠気が残る状態でゆっくりと体を起こす。

家の中は静けさが広がり、夜の闇が満ちていた。唯一の明かりと言えば、玄関の両隣にある窓から差し込む月の光だけだ。

そんな状況の中、サーラは自身に備わる種族の力を使って部屋を見渡す。

最初に目に入ったのは、部屋の中央に置かれた木製のテーブルと四つの椅子。次は玄関と隣にある台所。その近くには、備え付けのクローゼットある。それと反対側には、クロアが森で使った二振りの剣とソファアが置かれている。

人間族の家というものを見たことが無いサーラは、彼らの種族が使用する建物の構造を良く知らない。が、サーラは「この命の恩人の家は、意外とシンプルだ」という印象を受けた。

その時、彼女はその大切な人の姿が見当たらないことに気がついた。

もしかして、この部屋に取り残された！？

と思い、サーラは急激に泣き出したくなった。が、その気持ちもすぐに収まった。さらには、深い落ち着きを取り戻しつつある。

なぜなら、そこにはクロアと桃色の髪をした見知らぬ少女が、寝息を立てて気持ちよさそうに眠っていたからである。

この女の人が、リリンさん、なのかな？

サーラがクロアと共にこの村に向かう最中、簡単に彼から色々なことを教えてもらったのだ。

その中に、彼女のことが含まれていたから覚えていたのである。

などと思いを巡らせた後、サーラは自分が来ている服を見る。自身が着ていたものは、少し大きめの黒いローブであった。

ということは、クロアさんが隣で寄り添うように眠る彼女のどちらかが、自分の服を着替えさせてくれたのかと思い至る。

「……クロアさん、リリンさん。ありがとうございます……」

サーラは囁きよりも小さな声で二人の名前を呼ぶ。

そしてそれと同じ声量で、感謝の言葉をそつと告げる。

………

………

………

暗転。



眩しいくらいの朝日が、東の空から顔を覗かせた頃。

クロアは、玄関扉を開けて外に出た。ひんやりとした空気が肌に触れ、近くに生える草花の匂いに包まれる。

遠くの方には、山と山の間から太陽が顔を覗かせている。

その光を全身で受け止め、クロアは両手を上げて軽く伸びをする。と、固まった筋肉が悲鳴を上げ、体の節々にある関節が鳴る。

「はあ……」

と息を吐き、クロアは上げた両手を下ろす。同時に、霞がかった銀灰色の瞳に瞼を被せる。その後、自身の体内に持つ魔力を体中に巡らせた。

これは魔法を習い始めたばかりの時に、魔力を上手くコントロールできるようにと長老から教わった事の一つである。

魔力の循環がよくなり始めて数分。クロアの背後で扉の開く音が聞こえた。それにあわせて、クロアは半身を捻って家から出てきた人物を確認する。

扉の前には、まだ眠そうに目を擦るリリンの姿があった。

「おはよう、リリン。今日は、珍しく早いね」

「……あ、おはよう。なんか目が覚めちゃって。そういうクロアは眠くないの？」

声をかけるクロアに、リリンは眠気が残る顔つきで近づいて挨拶と質問を返す。

「早く起きる癖をつけちゃったから、もう慣れたよ。リリンはどうって聞くまでもないか」

器用なことに、彼女はクロアの腕を支えにして立ったまま眠っているのだ。

朝日を浴びると自然と体が目を覚ます。

と、どこかで聞いたことがあるが、今の彼女にはその意味を成さないようである。

「おい、リリン。そんな状態で眠るくらいなら、自分の家に帰って寝るか？」

立ちっぱなしのリリンに顔を向けて、クロアは控えめな口調で声をかけた。

しばらくの間、このままでいてもいいが、あいにく、これから朝食に使うクルグ果実を採りに行かなければならない。

クルグの果実は一皿食べると程良い甘味と酸味が広がり、肉体疲労の緩和や胃の消化機能を助ける効果を持っている果物だ。

「……ん。じゃあ、クロアの、うちで、寝る……」

何をどういう風に思い込んだのか、リリンはそんなことを口にする。それから、体をクロアの家の方へ向けて、ふらふらと歩みを進める。

「わかったから、ソファで寝てろっ」

その状態に呆れたクロアは彼女の体を支えると、リリンを自分の家に入れた。

「……あ、クロアさん。おはようございます」

扉を閉めたクロアが声のした方向へ顔を向けると、ベッドから上半身を起こしたサーラがいた。その姿を見る限り、体調が良くなったことが見て取れた。

「おはよう、サーラ。体の調子は、どう？」

つい先ほど採ったクルグの果実をテーブルに置き、クロアは彼女に問いかける。

「はい。まだ少し体の疲れは残っていますが、その他はもう大丈夫だと思います」

「そっか。それを聞いたら、なんか安心した」

クロアはサーラのいるベッドに座り、自分に向かって報告する彼女の頭に手を当て銀色の髪を梳くように撫でた。すると、サーラは気持ちよさそうに目を細めてお礼を述べる。

その後、何か不思議そうな表情をして玄関の方に目を向ける。

「あの、クロアさん。そこにおいてある果物って、何ですか？」

「……ん？ ああ。あれはね、クルグの果実って言うんだ。食べると、ちょうどいい甘味と酸味が広がる。それに、体に疲れが残っている時とか、胃の消化機能を助ける効果を持っているから、うちの村では結構重宝されているんだ」

ベッドから立ちあがったクロアは、テーブルにあるクルグの果実を手取る。そして興味本位に聞いてきた彼女の傍に戻って説明をする。

彼女はクロアが持ってきたクルグの果実を両手で受け取ると、そのままそれを顔に近づけて匂いを嗅ぐ。

「私の住む里では、こういった果実は、地形の関係で育たないんです」

彼女は上目遣いにクロアを見て言うと、「この果実、いい匂いですね」と感想を述べた。瞬間、サーラの方から空腹を訴える音が聞こえてきた。

サーラは、恥ずかしそうに顔を伏せる。

「昨日、晩御飯食べて無かったもんね。……じゃあ、少し待ってて。朝ご飯、作ってくるから」

そんな彼女に声を掛けると、クロアは彼女に手渡したクルグの果実を返してもらい、早速といわんばかりに台所に向かう。

最初は台所の水場を使い、手慣れた動きで野菜を水で洗う。それらを食べやすい大きさに切った。それを二分足らずで終わらせ、近くに置いた木製のお椀に盛る。

そして、クルグの果実の皮を包丁で剥き、野菜と同様の大きさにしてから同じお椀に放り込む。

最後に、買い置きしていた最後の酢を和えれば、クルグの果実を混ぜたサラダのでき上がりだ。

あとは、「ブル」と呼ばれるやや硬めのパンを人数分揃えるだけである。

「サーラ、できたよ。こっちにおいで」

ベッドの上で大人しくしているサーラの方に顔を向け、声を掛けたクロアは、できたてのサラダをテーブルに置く。

「はい、ありがとうございます。……あの、クロアさん」

サーラはベッドから降りると、クロアの傍に駆け寄り声を掛ける。直後、彼女は玄関の左隣りにあるソファーへ目を向ける。

「何？」

そう聞きつつも、クロアは彼女の視線の先を辿っていく。そこには、ソファアでぐっすりと眠るリリンの姿があった。

ああ、なるほど。

と、納得したクロアは視線をサーラに戻す。すると、こちらを見上げて小首を傾げる彼女がいた。

その仕草に一種の可愛さがあり、少しクロアの鼓動が高まった。

「リリンなら起きなくても大丈夫。いつも、お腹が空いたら勝手に起きてくるから」

彼女が何を言いたいことが察しがついたクロアは答え、サーラを椅子に座らせた。結局、リリンが起きてきたのは、クロアが椅子に腰を落ち着けると同時だった。

「……もう、クロアったら。すぐに起してくれればよかったのに」

そう言いながらも、彼女は二人の傍に近づき、空いている椅子に座る。

「ぐっすり眠る人を起こすほど、俺は厳しくはないよ」

といい、クロアはリリンと入れ替わるようにして立ち上がり、彼女のブルを取りに台所へ向かう。

「でも、クロアと一緒に朝ご飯を食べたいのは、ほんとよ」

ね？ サーラ、とリリンは畏まった風にいるサーラに視線を向け、同意を求めて声を掛ける。

「って、サーラに賛同を求めてどうすんだよ。てかお前、まだ、サーラに自己紹介してないだろ？」

返事に困るサーラの代わりに、クロアはリリンに突っ込みを入れてやる。と同時に、台所の方から持ってきたブルを彼女に手渡す。それを受け取ったリリンは礼を言うなり、「……え？ そうだっけ？」と惚けたことを言う。

本人の中では、とくに自己紹介を終えていたつもりのようなのだ。

「お前、な。サーラが来たのは昨日の晩だぞ？　それは、お前も……」

知っているだろうが、と言う前にクロアの近くで再び空腹を訴える音が聞こえてくる。

クロアはリリンと揃って、それが聞こえた方へ視線を向ける。と、恥ずかしげに顔を俯かせるサーラがいた。

「……ご、ごめんなさい。また、私です」

彼女は顔を上げると、バツが悪そうな表情で告げる。

サーラの頬が、ほんのり赤く染まっていたのは周知の事実である。

今日の朝食は、いつも以上に賑わったものになった、とクロアは感じた。それは、新たにできた友人サーラが加わったからだろう。

特に、サーラと一度も会話をしたことが無かったリリンは、彼女に対する興味が大きいらしい。その会話は食事を終えた今でも続いている。

初め、サーラはリリンの質問に答えるという作業を繰り返していたが、ある程度会話が進むと固かった表情も和らぎ、時節笑顔を見せて話すようになった。

「それでね、サーラ。私、この間の修業で、炎の中級魔法の十字架クロス・ファイアの炎炎を使えるようになったの！」

リリンは自身の胸元で拳を作り、興奮気味に目の前に座るサーラに言う。

「十字架の炎　ですか。私の使う魔法は、氷属性の召喚獣が中心だから、そういう魔法が使えるのは、すごく羨ましいです」

と、サーラは彼女の発言に驚き、感嘆の声を上げる。

それもそうだろう。リリンとは相反する属性を使い、なおかつ召喚獣を呼び出す魔法しか使えないサーラは、憧れ意識を持つのかも

しれない。その意識は、サーラと同じ氷の魔法を使用するクロアも一緒である。

そう思いながら、クロアはお盆に乗せたクルグの葉で煎じたお茶を人数分持つて、彼女達のいる方へ向かう。

「とりあえずお茶入れたから、飲みながら話そうよ」

「ありがとう、クロア」

「ありがとうございます」

クロアが彼女達の前にお茶の入った湯飲みを置く。と、先ほどまで会話をしていた二人が笑顔を見せてお礼を言ってくれる。

「どういたしまして」

と、クロアは笑顔付きで言葉を返し、空いた椅子に腰を落ち着ける。早速と言わんばかりに温かいお茶を一口飲む。

ほんのりと甘い香りと味が口の中に広がり、疲れた体を癒してくれる。それがクルグのお茶の効果であり、クロアの数少ない好物の一つである。

「そういえば、ねえ、クロア。いつもの行商人達が来るのって、確かもうそろそろ来るはずよね？」

何をどうやって思い出したのか、リリンは自身の顎に人差し指を当てて、そんなことを聞いてくる。

「え？ 来るとしたら今日当たりだと思うけど。それが、どうかした？」

なんで今、それを聞く？

と疑問に思ったクロアだが、すぐに真剣な顔つきをして答える。

このリリンの突発的な思いつきというか考えは、たまに最もな発言をするという意表を突くことをしてくれる。これは、幼い時より共に過ごしてきたクロアにとってはもう慣れたことである。

ようするに彼女が言いたいことを想像すると、自分達の住む村にやって来る行商人達の姿をサーラに見せてやりたいのだと思う。それを考えると、今のリリンにとってサーラは大きな存在のようだ。

クロア達の住むゴードラ村には、五十人少々の人々が住んでいるが、

その住人の半分以上は成人した若者や年配者が占めている。そのため、おのずとクロア達のような子供の数が少なくなるのだ。

それでは遠くない未来に、クロア達の生まれ育ったこの村は高齢の人々しかのこらなくなってしまう。それはつまり、廃村の危機に繋がりがねない。

などと実際にありえそうな未来を想像していたら、湯呑みを両手で持ってお茶を飲むリリンが口を開ける。



「うん。サーラに、その人達の様子を見せてあげたいなって思ってたそれに、私の家でも買っておかないといけない物があるし……」

彼女の家には、ちゃんと両親がいる。確かリリンの父親は行商人をしており、仕事の関係であまり家に帰ってこないことがほとんどだ。

生活面に関しては、母親の手一つで成り立っている。

その娘にあたるリリン曰く、週に何度かは母の手伝いをしているらしい。

今はもう慣れてしまったが、クロアがそのことを初めて聞いた時は、声を上げて驚いたくらいである。

いつも彼女は、猫みたいに自由気ままな行動と、のんびりとした雰囲気を持って生きている。そして、冬場になると日の当たる温かい場所を探しては日向ぼっこをしたりする。

それくらいのマイペースぶりが彼女の長所であり、同時に短所にもなりかねない。

しかしそんな彼女に慣れば、一種の可愛さというものを感ずるだろう。

「なるほどね　って、サーラ、どうした？」

リリンの言葉に頷きつつも、ふとクロアがサーラを見ると、眉間にしわを寄せた彼女は窓　いや、正確には、その向こう　を見  
ていた。

「……あ、いえ。さっきから、なんだか強力な気配のようなものが、近づいている気がして」

窓から視線を外すと、彼女は顔をクロアに向けて答える。その声音には、どこか不安げなものが含まれている。

すぐさまクロアは目を閉じ、その方向に意識を集中させる。と、瞬く間にとまではいかないが、サーラが言っていたそれに近い波動

を遠くから感じ取れた。進行方向からして、どうやらこの村に向かっているようだ。

「私には、クロア以外の大きな魔力なんて感じないけど……」

クロアは、どう？ と、リリンは問いかけてくる。その様子からして、彼女はクロアと似たようなことをしていた様子。しかし、その結果はクロアと同じ結論には至らなかったらしい。

「リリンの言う魔力の方はどうかと思うけど、俺はサーラのその線に近いものが、この村にくるのを感じたよ」

「それって、私達の住む村が、襲われるってこと？」

「いや。そういうことなら、長老様が使い魔を放って、村中に知らせてくれるから」

「……誰か、誰かおらぬかつ！！」

深刻なクロア達の会話の中。突如、外で馬が走る音と共に、男性の大声が聞こえてきた。

クロアはその声に反応して素早く台所の方へ移動し、その上にある窓から外の様子を窺う。

そこには、茶色い毛並みの馬に跨った兵士らしき人物がいた。簡素なレザーアーマーを身につけ辺りを見渡している。が、他の住人達は彼を警戒しているためか、外に出てくる気配が全くない。

なら、俺が代わりに、対応するしかないか……

言うが早いか、クロアは玄関近くの壁に立てかけていた二つの魔法剣を手にする。その時、背後からリリンが自分を呼び止める声が聞こえる。

「ねえ、クロア。何か、あったの？」

クロアが振り返った先には、心配げに自身を見つめるリリンとサーラの姿があった。

そう彼女が口では聞いても、自身を見つめる目には「死なないで」と訴えかけている。

「大丈夫。これは、念のために持っていくだけだから、二人はここで待ってて」

二人を安心させるためにそう言い残すと、今度こそクロアは彼女達に背を向けて、家を出て行く。

もちろん、戦闘にならないという保証は全くないわけだが。

「ねえ、その兵士さん！　うちの村に、何か用？」

東の空に浮かぶ太陽に照らされながら、クロアは馬に跨る青年に声をかけた。

器用なことに彼は、馬上で上半身だけを捻ってクロアに視線を向ける。その姿を認識するや、彼は跨る馬ごとクロアに近づけた。

「馬上から失礼する。至急、この村の長老殿に伝えたいことがある。すぐに連れて来てはくれないか？」

と、そんなことを彼は問いかけてくる。

言葉の使い方には気をつけているみたいだが、初対面の相手に対して少し不躡な物の尋ね方ではないだろうか。

彼の発言を聞いたクロアは、そう感じられた。

「その前に、自分の名前を言ってくれない？　初対面の相手に何かをする時は、まずそれからでしょ」

クロアは背負った魔法剣の一本に手を掛け、思ったことをそのまま口にする。

目上の人には、こんな口の聞き方はあまりしないが、今の状況では仕方がない。

それを相手は、どう受け取ったかは不明だが、馬上の彼は馬から降りた。

「いや。それは、すまなかった。気を悪くしたなら謝るよ。ごめん……俺の名前は、ロランっていうんだ。王都にある、調査部隊の見習い兵士だ」

簡素なレザーアーマーを身に付けた青年ことロランは、謝罪の言

葉を述べると共に自己紹介を行う。そして、自身の右手をクロアに向かつて差し出す。

「ゴードラ村の、クロアです。よろしく」

クロアは自分の名前を彼に教えると、差し出された手を握り返す。

「こちらこそよろしく。……で、早速で悪いんだけど、長老殿のいる場所まで案内して」

「その必要はなからう」

突然の声に驚き、それが聞こえた方へクロア達はぎょつとした。

二人が視線を向けた先には、深緑のローブを身に纏った老人が身の丈ほどの杖について立っていた。

「長老様。いつの間に、ここへ」

来たんですか？ とクロアが続ける前に長老は、さっと空いた片手を上げる。その合図に従ってクロアは口を閉ざすと、長老はローランの方に視線を向けた。

「ロランとやら。すまぬが、離れた場所で待機させておる行商人達を連れて来てはくれまいか？ 我らも、生活というものがあるのでな。……それと、彼らの護衛をしておるお主の長と話がしたい」

「はっ。ただちに」

そう指示されたロランは、長老に向かって敬礼をして答える。と、彼は早速と言わんばかりに馬へ跨り、すぐに来た道を引き返す。

「長老様、いいんですか？ 行商人の方はともかく、彼の部隊をこの村に引き入れて」

ロランの後姿を見届けながらも、クロアは自身の傍らにいる長老に声を掛ける。

そのどこが可笑しかったのか、長老にしわがれた声で笑われた。「クロアや。お主の心配は無用じゃ。あの青年は、王都の調査部隊だと言ったじやろう？ 実はな、あの部隊の長こそ、わしが古くから知る友人なんじゃ。それほど、お主が危惧することではない」

と言われた。その後、長老は「確か、あやつは今年で還暦じゃったかのう」などとぼやきつつ、雲一つない空を眺めている。

「まあ、長老様がそう言うなら、気にはしません」

長老の言うとおり、クロアは心の中で彼らが良からぬことをしなにか心配で仕方なかった。

しかし、この村の長であるこの老人が、一言「大丈夫だ」と言えば、ここに暮らす者達は一応、警戒心は解くだろう。

数分後。

調査部隊の見習い兵士ことロランは自身の仲間と行商人達を引き連れ、クロア達の所へ戻ってきた。さきほどの長老の言葉は本当らしく、馬から降りた調査部隊の長と仲良く談笑し始めたのである。

クロアはと言うと、そんな老人二人をよそに背負った魔法剣を家に置きに戻っていた。その時に、部屋で大人しくしていたリリンと

サーラに、今しがた起きたできことを手短に伝えた。

「やったあ。これで、サーラとお出かけができるー！」

「……王都の調査部隊ですか。私、なんだか不安です……」

と、クロアの報告を聞いた二人は思い思いの言葉を口にする。

リリンの方はともかく、サーラの気持ちはクロアにもなんとなく分かる気がした。

王都の部隊が、こんな田舎にある村に何を調査しにきたのか不明である。

心当たりがあるとすれば、昨日の長老に頼まれた一件くらいしかない。そうなると、ティモールの森で会った赤い竜の紋様の一団とサーラについてだろうか。

一番、その可能性が高いな……。

と思いつつ、クロアは脳内で広がる思考をそこで止め、視線をリリンの方に向ける。

「ねえ、リリン。リリンは何を買いに行くの？　うちも、そろそろブルとか野菜を仕入れとかないといけないから」

そう言いつつ、そのついでに調査部隊から詳しい情報を聞き出すと考えたりするクロアである。

「もちろん行くよ……と、その前に私、一旦、うちに戻らなきゃ。何が必要か、お母さんに聞いてこなくちゃ」

椅子から立ち上がったリリンは、クロアに向かってそう告げる。

その後、サーラに「じゃあ、また後でね」と声をかけてから家を後にする。

リリンが立ち去ると、さっきまで会話で賑わっていた部屋に静寂が訪れた。

聞こえるのは、クロアとサーラの呼吸する音だけ。それもそのはず。先ほどの会話を仕切っていたのは、リリンなのだから。その本人がいなくなれば、自然と静かになるわけである。

そんな状態の中、最初に口を開いたのはサーラだった。

「あの、クロアさん。さっきの、強力な気配なんです……」

「さっきの話だね。それが、どうしたの？」

「……えーっと、その気配なんですけど、今、この村にいます　いえ、あります」

という含みのある言い方で告げるサーラの言葉に、クロアは少しばかり疑問を持った。

「あるってことは、それは人ではなくて、何かの物ってこと？」

ついさっきまでリリンが座っていた椅子に腰かけたクロアは思ったことを、そっくりそのまま口にする。と、サーラは困った風な笑みを浮かべる。

「確かに、物と言えば物ですね。　「コリング・ストーン」 召喚石　と言った方が、わかり

やすいかもしれないです」

「……コ、コリング……何だって？」

聞き慣れない言葉に首を傾げ、クロアは思わず彼女に聞き返した。するとサーラは、意外なものを見たというような表情で彼を捉える。

「あの。もしかして、クロアさんは、ご存じないですか？　　召喚

石　のこと」

彼女の問いに対して、クロアは素直に首を縦に振る。すると、彼女は「それでは」と言って説明を始めた。

「召喚石　とは、自らの意思を持つ強力な召喚獣が眠る石のことです。といっても、そこら辺に転がっているような石ではないですが。たしか、形状は人の掌サイズですね。

色はそれぞれの属性によって異なります。例えば、風属性なら緑、炎属性なら赤、水属性なら青、という感じに。

先ほども言いましたが、自分の意思を持つ召喚獣達は、自身の属性を示した色の半透明な石の中に眠っているんです」

と、サーラは昨日今日とでは見たことのない、しっかりとした面持ちと口調で、目の前にいるクロアにそう教える。

正直、驚いていた。外見とその口調で大人しい印象を受けるサーラが、ここまでの説明力があるとは思ってもみなかった。

彼女の意外な一面を見たクロアは驚きのあまり、かける言葉を失

ったのである。

そもそも、術者の呪文詠唱によって呼び出される召喚獣は、通常、異次元に住む生き物のことを指す。その姿形や能力は術者の技量によるが、基本的に魔力の多さや心の強さによって変化する。

それが、クロアが長老から教わった召喚獣の基本だ。



しかし、それとは異なる物 「リンク・ストーン」 召喚石 のことだが について全く聞かされてもいなかったし、見たことすらないのだ。

「……あの、クロアさん。大丈夫ですか？」

唐突に黙り込んだクロアの様子に一抹の不安を覚えたサーラは、椅子に座ったまま頭を低くする。そして、上目遣いにクロアを見ながら問いかける。

「え？ ああ、ごめん。まさかサーラが、こんなに上手くしゃべれるとは思わなかったから、少し驚いただけ」

ごめんね、ともう一度謝りながらクロアは彼女に答える。

その様子を見て安堵したのか、サーラは「良かった」と言っ  
て胸を撫でおろす。

彼女の言ったことを簡単にまとめると、その 召喚石 に封じられた召喚獣が、誰かの手によって村に運び込まれたということになる。

となれば、一つの疑問が浮かび上がる。

「ねえ、サーラ。もし誰かが、その 召喚石 を使って暴れたりしたら、どうなるの？」

「その心配はいりません。通常の召喚獣は、術者の呪文詠唱とその力によって召喚されますが、 召喚石 の場合は違います。先ほども言いましたけれど、 召喚石 には強力な召喚獣が封印されています。」

そして、その封印を解くためには、まず術者の力が彼らに認められることが、必須条件なんです。ですから、それで術者が悪しきことを行う、と言うことは万に一つとしてあり得ません」

断言付きの説明が終わると、サーラは肩の力を抜いて深呼吸する。直後、玄関の方から誰かの足音が聞こえた。と同時に扉が開き、そこからリリンが顔を覗かせる。

「あ、二人とも、おまたせ。出かける準備、できたよ」

リリンはその状態のままで声を掛ける。直後、早く行こうよ、と催促するような顔でクロア達を見つめる。

「わかったよ、リリン」

こちらを見る彼女にクロアは微笑むと、傍らにいるサーラに視線を向ける。

「はい！喜んでついて行きます」

本日、クロアは何度目かになる外出を果たした。

やや温もりの増した朝日を全身に浴びて、クロア達は長老の屋敷前で開かれる行商人の露店へやって来た。

露店と言っても、荷馬車の一番後ろの扉を開け放って商売するだけである。

その中には、食糧や薬などの生活の上で欠かせない物が色々入っている。さらに露店の周囲には兵士の姿が数人見え、彼らの様子を見る限り、荷馬車に繋がれた馬の世話や荷物の見張りをしているようだ。

「ねえ、クロア。早く行商人の所に行こ？早くしないと、買う物無くなっちゃうかも」

と、リリンはサクロアが着る服の腕部分をさっと掴み、急かす口調で告げる。

「そうだね」

彼女の言葉にそう相槌を打つと、クロアはリリン達を連れて、人だかりがきつつある場所へ向かう。

「ガリーエさん、こんにちは！」

見知った行商人を見つけたクロアは、明るい声で挨拶をする。と、自分の荷馬車にある物を点検していた男性が半身を捻って後ろを振り向く。

日に焼けた焦げ茶色の肌に漆黒の髪に、精悍な顔立ちで男らしい

筋肉質な体つきを持った男性だ。

彼の名前は、ガリーエ。コードボルト国南部にあるムバ港町の出身だ。

彼は十年くらい前から行商人を生業としている。ちなみに、服装は群青色のタンクトップに、土埃のついた黒いズボンである。

「おお、坊主。久しぶりだな！ 元気にしてたか？ えっ！」

ガリーエは破顔するなり、クロアに近づいてバシバシとその背中をどやしつけた。

「……ガ、ガリーエさんも、お、お元気そうで、な、何よりです」

そろそろ、俺の名前くらい覚えてくださいよ、とクロアは冗談半分にツツコミを入れつつ手の甲で彼の胸元を軽く叩く。

彼の背中のだやしに、クロアは危うく舌を嚙んでしまつかと冷や冷やしたが、今回はその心配は無用に終わった。

「当ったり前よ。腐ってもこのガリーエ、生れ故郷でつけた体力と筋力は、二十五年生きてきた今でも健在だぜ！」

ガリーエは片腕を上げて自慢げに告げる。と、両手を腰に当ててこう続ける。

「でだ。うちの品物で何が入用だ？ お前は、俺の大事なお得意様だ。いつものように安くしておくぜ」

お嬢ちゃん達も欲しい物があつたら言いな、と彼は人懐っこそうな笑みを浮かべて、クロアの後ろにいるリリン達に声を掛ける。

それを皮切りに、リリンは自分の家で必要な物を書いた紙をガリーエに渡し、クロアは彼女と同様に、必要なものを口頭で伝えた。

その様子をクロアさん達の後ろで、サーラは物珍しい表情で眺める。

自分の見たこと無い物や生き物（馬のことだが）を観察していた。そうしていると、クロアさんがガリーエと呼んだ男性が「何が

るか？」と聞いてきた。

普段、見慣れない光景ばかりなので、こういう物が売られているのかもわからない。

「……あ、いえ、私は持ち合わせがありませんので、買うことができません。申し訳ありません」

サーラは控えめな態度で、ガリーエに向かって軽く頭を下げて謝る。斜め前にいるクロアさんの腕を掴んで。そうしていないと、心持ち不安になってしまう。

その対応をガリーエはどういう風にとったのか、すぐに荷馬車の中に入ってしまう。

何か、まずいことでも言いましたか？

と、サーラの内心は不安な気持ちに駆りたてられた。

しかし、彼はすぐに荷馬車のから出てきた。その手には、長い赤い紐で口を結んだ小麦色の小さな袋があった。それを持ってガリーエが目の前に来ると、サーラの手首を掴んでそれを掌の上に置いた。

「……あの、これは？」

彼の行為の真意を上手く掴めなかったサーラは、そつと上目遣いにガリーエを見て問う。

「お嬢ちゃん、こいつの知り合いだろ？ ああ、自己紹介とかはしなくていい。俺は昔っから、人の名前を覚えるのが苦手なんだ。今渡したのは、ポアって言う花を乾燥させて、袋詰めした香り袋だ。この間寄った村で貰った品物でな、それが最後なんだ。お嬢ちゃんにやる。首から下げておくといい」

と、ガリーエは破顔して説明をする。

いきなりのプレゼントに、サーラは理解が出来なかった。それどころか、逆に申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「……いえ、そんなつ。これは、最後の つ！」

半ば困惑気味のサーラは、納得ができず終始笑顔なガリーエに反論する。が、それを彼は人より少し大きな手を、彼女の頭に置くことで押しとどめる。

ガリーエの手の温もりが頭の上からゆっくりと伝わり、彼の持つ優しさを感じ取れた。

サーラの一族は元より、万物の気配や世を生きる者が持つ感情を読み取ることに、優れている種族なのだ。そのため、他者が自分にどんな感情を抱いているのか、すぐにわかったりする。

「確かに俺は、ポアの香り袋はそれが最後だと言った。だがな、お嬢ちゃん。この世にはな、それを持つべき奴、そうじゃない奴ってのがいる。俺みたいに元氣すぎる奴が香り袋なんて物を持っていたら、周りから奇異な目で見られちまう。」

へたすりゃ、うちの売上が低迷しちまうんでね。だからこうして、お嬢ちゃんみたいな子に渡してやっているんだ。その方が俺としても都合がいい。というのも、俺ら行商人の中じゃあ、物を買ってくれる人の信頼性が重要なんだ。その信頼が無けりゃ、品物は残るし金は入らねえはで、大変な目に会うからな」

そう言うなり、ガリーエは両手をあげて肩をすくめてみせる。その後、彼は再び荷馬車の中に入り、クロアとリリンが頼んだ分の食料を取り出しにかかる。

彼らの目的の物を出すと、ガリーエはクロアとリリンに紙袋に詰めたそれを手渡していく。そんなガリーエに、サーラは近づいて声を掛けた。

「……あの、ガリーエさん。ありがとうございます」

他に、何か用か？ という表情をする彼に向かってサーラは、軽く頭を下げてお礼を述べる。

「ふっ。別に、礼を言われる筋合いはねえよ」

ガリーエに短く鼻で笑われながらそう言われた。その声音には、どこか嬉しげなものが含まれているような気がした。

「わざわざありがとう。ガリーエさん」

「って、お前まで礼を言うか」

再度お礼を言ったクロアにも、ガリーエはさっきと同じ調子で突っ込みを入れる。

「それじゃあ私、荷物を置きに家に戻るね。クロア達はどつするの？」

「うーん、それじゃあ俺も、リリンと同じように家に戻るよ。さすがに、これを持ったまま動きたくないし」

僅かに思考した後、クロアは「帰り道だし、リリンの家までついて行くよ」と提案する。

「えっ。いいの？ やった！ クロア、ありがとう！」

幼馴染の言葉を聞いたリリンは、無邪気な笑みを浮かべて飛び跳ねた。その動作に合わせて、袋の一番上にあったブルがピョンツと軽く跳ねる。

嬉しい気持ちがりリンの顔に表れるだけでも、彼女のご機嫌が急上昇したことが見て取れた。

そんなに喜ぶことかな？

彼女の姿に苦笑しつつも、クロアは内心で思う。

この場でじっとしているのも憚れるため、そろそろ移動しようとしたその時だ。

『……お願い……助けて……！』

と、何の前触れもなしに女性の苦しそうな声が聞こえた。それは直接、脳に響くような物であった。

すぐにクロアは辺りを見渡すが、その声の主らしき姿は見当たらない。それに、先ほどまで頬を撫でるようにして吹いていた風も止まっている。

やがてそれと入れ替わるようにして、ピリピリとした風が村を通り抜ける。そこで、キュツとクロアの服の袖を掴む感触が伝わってきた。

その方向へ顔を向けると、瞳を涙で潤ませたサーラがいた。

「……あの。クロアさんは、気がつきました？」

「気がついたって、さっきの声だよね？」

「はい。もしかすると、風のせ　きやっ」

最後まで言い切らぬ内に、いきなりクロア達の眼前でボンツと白い煙が上がる。

突然のできごとに、クロアは声にならない驚きを示し、マイペー スなりリンは咄嗟に身構えた。サーラは反射的にクロアの腕を抱きしめ、その背後に回ったりした。

ガリー工はという対して驚いた様子は見せず、物珍しげに上がった煙を見やっている。

やがて眼前の煙が晴れると、眼下に淡い黄色の羽衣を身につけた男性が片膝を折って頭を垂れた状態でいた。

髪は長老の服と同じ深緑色で、やや日焼けした肌が印象的である。「クロア様。ならびに、そのご友人の方々に申し上げます。我が主、長老様より召集がかかっております。至急、屋敷の方までお足を運び申し上げよう、託を授かっております。至急、屋敷の方まで来られますようお願い致します」

下げた頭を持ち上げるなり、彼は自身が預かった伝言を披露した。それが終わると同時にまた煙を上げて、その身をどこかに消した。



「……で。どうするんだ？ 今すぐ長老の家に行くなら、その荷物、しばらくうちに預かっておこうか？」

なに、また金なんか取りはしないって、と言いつつガリーエは平然とした表情で提案する。

「……えっ。いいの？ って言うか、今を見て驚かないの？」

「ん？ ああ、さっきのか。別に驚きはしねえよ。さっきの、召喚獣だろ？ あのくらいなら、王都の見世物屋がちよくちよくやってるしなあ。だからかね。とまあ、その話は置いて、とりあえず行つて来いよ。預かつといてやるから」

と、半ば強引にガリーエに買ったばかりの生活用品を預けることになった。

長老のいる部屋は、相変わらず香水の匂いが満ちていた。

昔から何度も彼の屋敷にはお邪魔しているが、その匂いに未だに慣れる気配がない。

背後にリリンとサーラを伴って屋敷に入ったクロアは、部屋の奥にいる長老に目を向ける。

部屋の最奥にある机に備え付けの椅子に座す長老が座し、向かいには鎧を身につけた恰幅の良い白髪の騎士が立っている。装備している防具や剣は、全て赤で統一されていた。

その後ろ姿を見ただけでは、厳つい表情の人物なのだという印象を受ける。

しかし、振り向いた彼の表情は、自身が思い浮かべたそれは無かった。代わりに見る者を安堵させるものがある。

「やあ、きみがクロア君だね？」

そんな彼は陽気に片手を上げると、当たり障りのない笑顔で挨拶

をしてきた。

「はい、そうですが……あなたは？」

特に彼に対する拒絶が無いクロアは、あっさりと肯定したあとそう聞き返す。と、なぜか見知らぬ彼の傍らにいた長老が立ち上がり徐に口を開く。

「クロアや。この方はの、この度、ティモールの件についての」  
老騎士の代わりに紹介しようとする彼を見て、それを本人が片手で制した。

最初、長老は不服そうに老騎士を見たが、すぐに口を閉じ椅子に腰を掛け直した。その顔には、どこか不服そうなものが含まれていた。

「さて、改めて自己紹介をしよう。私は、国王陛下より調査部隊の長を任されておる。名を、ロジックと申し上げる。このような老いばれであるが、君達に尋ねたいことがある。中には不躰な物もあり知れぬが、どうかご勘弁を」

玄関で訝しげに見つめるクロアに向かって、丁寧な態度で挨拶を述べる。次いで、老騎士ことロジックにこちらへ来るよう、クロア達は手招きを受けた。

一瞬、サーラが顔を曇らせたものの、特に反対することもないクロアは素直に彼の指示に従った。

ロジックは、彼らがソファアーに座るのを見届けた後、すぐに口を開いた。

「早速だが、まずクロア君に一つ。昨日の夕刻頃、ティモールの森内部　つまり中心部から南東部に位置する場所で、四人の死体が見つかった。彼らはレザーアーマーを身につけていたにも関わらず、胸元を刃物で一斬りされていた。我々がそこに着いた頃にはこと切れていた。これは君の仕業かい？　……ああ、安心してほしい。別に答え次第で君の身柄を押さえる、なんてことはしないさ。ただ、

世間に出まわっている剣では不可能に近いから、聞いているだけだよ」

もう一度、安心してくれ、と付け足しつつ、ロジックはクロアに質問を投げかける。

と、ほんの僅かに顔をしかめたクロアだが、すぐに得心がいったようなものが顔に表れた。

他にも、彼の右隣に座っていた桃色の髪をした少女が息を呑んだ。その表情には、動揺を浮かべてクロアの方を見つめていた。

それをどう判断したのか、彼は彼女の視線を無視して立ちあがると同時に低音の効いた声音で呪文を唱えた。

直後、眼前にある一部の空間が白光し、そこに刀身に蒼きオーラを纏う二振りの魔法剣が現れる。

何をはじめなのだ、と一瞬身構えたロジックだったが、それが魔法剣の呼び出し呪文だとわかり関心の声を上げた。

今時の村人　長老の教え子に当たる　が魔法剣を扱うなど、非常に珍しい。しかも、二刀流になると自身が今までに見てきた中では、彼が初めてである。

そもそもこの世界（人間界）には、魔法剣が少なすぎるのだ。その原因は、おそらく魔法剣を生成可能な超一流の魔法使いが、減少しているからであろう。

王都の国立図書館にある文献を読むには、今から三百年くらい前まではかなりの数があつたそうだ。

と思考している内に、質問を受けたクロアが口を開く。

「確かに俺は、彼女を助けるためにティモールの森で、この魔法剣を使って彼らを倒しました」

と、自身の前で浮遊する剣を手にしたクロアは答えた。その後、サーラの方に目を向ける。それに気がついた彼女は、ぎこちない小さな笑みを返すだけである。

見知らぬ人の前で、無意識に体に緊張を走らせているのだろう。  
自分の　もしくは、竜神族の　存在が否定されるかもしれない、  
と彼女は心のどこかで思っているのかもしれない。

もしクロアが彼女と同じ立場ならば、きっと同じことを考えるだろう。

と思考を巡らせていれば、彼の答えを聞いたロジックが言葉を発する。

「……そうか。君は、魔法剣を扱う子なのか。この目で見たのは、  
ずいぶん久しいな。その剣を扱い始めて、どれくらい経つ？」

「二刀流の使用は、まだ二年しか経っていません。だけど、魔法剣  
の扱いに関しては、もう五年になります」

それでも、まだ魔力の消費や肉体的疲労が激しいですが、と付け  
足しつつ答える。

本当にそうなのだ。

魔法剣は刀身に魔力のオーラを纏っていて、一般の兵士が使用する剣よりも切れ味が格段に高い。

その上、剣の鍛錬も最低二年以上もの月日を必要とされる。でないと、上手く扱いきれずに自分の魔法剣で怪我を負ってしまう。そうなれば、もう軽い怪我では済まされない。

何せ、切れ味が通常の剣と比較して五倍も違うのだ。

特に、魔法剣の中には、自らの意思で主人を選ぶもの 現に、クロアの持つ魔法剣がそうだ が存在する。

それがどういう原理でできているかは全くの不明。その製造法も、まともに残ってはいまい。

しかし、そういうレベルのものであれば、例え遠く離れた場所にいようと呪文の詠唱によって自分の元に呼び出せる。

というのが、クロアが知る魔法剣の全てだ。

が、かつて二千五百年の歴史を持つコードボルト王国でも一度だけ、この自らの意思を持った魔法剣に支配された男が、王城とその都を壊滅に追い込んだということ件を、長老が持つ歴史書で読んだ記憶がある。

確か、その書物内での結末は

『血の如く赤きオーラを纏いし剣の持ち主は、二日に渡って三百の国民と兵士の殺戮を行ったのち、突如としてその姿を眩ます』

と記されていたはずである。

その後、王城と都は平穏を取り戻したとある。数日後、そこに住まう民と兵士の慰霊碑が王都の広場に建てられたと言う。

とにかく、大量殺戮を行った男がその魔法剣をどういう経緯で手

に入れたのかと、その後の行方は不明なままに終わっている。

もしかすると、今もどこかでこのうのと生きていたりするのだろうか？

と、ありえないことでも不吉なそれをクロアの脳裏を横切ったりした。それはともかく、話が横道に逸れてしまった。

「それで、その魔法剣の扱いが何か？ ……まさか、取り上げてことは無いですよ？」

気を取り直したクロアは改まった表情で、正面にいるロジックに問うてみる。

「いやいや、別に取り上げたりはしないさ。ただ、その若さで魔法剣を扱えるとなると、飛び抜けた剣の才能があるのかと、感心したのだよ」

そうだよな、と彼は右隣にいる長老に顔を向けて同意を求めた。

「まあ、確かにこやつには剣の才能があるが、魔法のそれに比べるのだいぶ劣るがの」

「ひどいつ。それじゃ俺が、毎日の剣の修業をさぼってるみたいな言い方じゃないですか！」

「間違つてはおらぬじやろう？ 実際に、昨日の昼間は村を抜け出して草原の方まで行っておったのだらう？」

「……っ！ た、確かに行つてはいましたけど。昨日はティモールの森で実戦を経験したじゃないですか！ それで十分だと、俺は思いますけど？」

などと言いいいをしていたら、豪快とまではいかないがそれに近い笑い声が聞こえてくる。クロアと長老が二人揃つてその方に顔を向ける。と、腹を抱えて笑うロジックの姿があった。

一体、今のどこに笑う要素があつたんだ？

と思えるくらいのウケっぷりである。

「……ああ、いや、すまん。笑うつもりはなかったんだ」

なんとか笑いを堪えたロジックは謝ると、不意に長老の方へ視線を向けて口を開く。

「おい、あまり子供相手にむきになるな。そう言う所も、相変わらず変わっていないな、お前は」

「ふんっ。お主に言われる筋合いは、更々無いんじゃないの」

明らかに、長老はロジックの言葉に気を悪くしたようだ。その証拠に、彼は非難する目つきでロジックを睨んでいる。

が、その本人は長老のことはお構いなしに、今度はサーラの方へ視線を向けた。

「さて。次は、お嬢ちゃんの番だよ。……準備はいいかい？」

「……はい」

そう声を掛けられた彼女は、ロジックに顔を向けると真剣な面持ちで返事をする。

心なしか、相手を警戒しているような気がした。

「いや、そんなに身構えなくていいよ？ 内容によっては拘束して王都に連行する、なんてことはしないから。それはまた別の部署がすることになっているからね」

と、クロアと同じようにロジックもサーラに何か感じたのか、そう声を掛ける。そして一度、気を取り直すように空咳をすると、彼は少し大きく息を吸った。

「まず、これは確認だが。お嬢ちゃんは、竜神族なのかい？」

「はい、間違いありません」

最初の質問に、サーラは首を縦に振って答える。

これは、クロアも確認済みの事柄だ。しかし

「それを証明できるものは？」

「……ありません……」

この問いで、サーラは少し言葉を詰まらせる。

確かに、クロア自身も彼女が竜神族である証拠を見ていない。

外見的特徴があれば、すんなりと納得できるのだが……。クロア達人間と竜神族であるサーラの外見的違いは全くと言っていい程ない。むしろ、見つけられる方がすごいと思う。

「本当に？」

「はい……」

と、弱々しげにサーラは返事をする。

その時のサーラの表情には、どこか翳りを含んでいた気がした。

もしかして、周りにはあまり言いたくないのだろうか？ それとも、言えない何かがあるのか？

その辺りはロジックも察しがついているのか、彼女の心中を思つてか深く追求してこない。

「ふむ。それじゃあ、どうやって人間界に来たんだい？ 月の掟によると、三つの種族は、それぞれの世界で生きることを決められている。自分の種族以外の世界に、干渉は許されないはずだが？」

「……それは、私にも、わかりません。いつものように、家の庭を散歩していたら、急に目眩がおきて意識を失いました。それで、意識が戻ったら、もうそこは、私の住む世界じゃなかった。それで

」

「それで、自分の世界に帰ろうとしたが見つからず、レザーアーマーの右胸に赤い竜の文様を彫り込んだ連中に追われたわけか。それで、私の手紙を見たお前が、クロア君に調査を頼んだわけだな。なるほど。これで一応、筋は通るな」

と、彼女の言葉を引き取るように言い、ロジックは納得の声をあげた。しかし、まだ疑問は残るようで彼は難しい顔をしている。しかも、腕を組んで何やら思考していた。が、それは数秒も行かぬうちに終わった。かと思えばクロア達を見渡し、にっこりと笑ってみせる。



「よし。今回は、このぐらいにしておこう。実を言うと、まだ疑問に残ることは少しだけ残っている。だが、我が古い友人の弟子でもあるから多めにみよう」

「……え？ ロジックさん。本当にいいんですか？」

その言葉にクロアは、ついつい拍子抜けしてしまう。だが、ロジックの方はそれで割り切るつもりのもりのようで、肩に手を当てて腕を回している。

それについてはサーラもクロアと同意見なようで、不安げな眼差しでロジックを捉えていた。

「ああ、本当にいいさ。あまり深く入り込んでも、お譲ちゃん<sup>ニ</sup>は答えてくれそうにないしな。それに、お譲ちゃん<sup>ニ</sup>みたいな娘は傷つきやすいから、かな」

どうやら、もうこれ以上、クロアとサーラからの事情聴取は終わるつもりらしい。

それでもクロアとサーラは、どうも腑に落ちないでいた。が、それを打ち切るように長老が椅子から立ち上がり、言葉を発した。

「さて、クロアとサーラ、そしてリリン。いきなりの呼び出し、すまんかったな。あとは、それぞれ家でゆるりと過ごすといい」

「はい、わかりました。それじゃあ、失礼します」

そう言っただけクロアは立ち上がり、長老たちに頭を下げる。そして、両脇に座っていたサーラとリリンも彼に倣い、頭を下げて玄關の方まで移動する。

外へと続く扉の取っ手をクロアが握った時、不意にロジックの声が聞こえた。

「……ああ、クロア君。ちょっと待ちなさい」

と、いきなり呼び止められたクロアは扉付近で立ち止り、後ろを振り返る。

そして、小首を傾げてロジックの方を見ると、彼は落ち着いた足取りで近づいてきた。かと思うと、さっとクロアの手に何かを握らせた。

感触的に丸みを帯びた小さな玉のようなものだ。しかも、つるつるとしている。実際に手を眼下まで上げて広げてみた。

そこには、深海を思わせるような深い蒼に、何か翼を生やした生き物が入っている。見ているだけでも、強い力を秘めたものだと分かる。それが手の中にあるというだけで、その力が数倍にも感じてとれた。

「あの、これは？」

手に乗った玉をロジックに見せながら、クロアは問いかける。

「それは、今回の調査に協力してくれたお礼だ。今では珍しい、コリングストーン

召喚石 だよ。昔から私の家にあったものだが、どうもそこに眠る召喚獣のお気に召さないようだね。よかったら、クロア君に譲るよ。キミの方が、私より遥かに適正がありそうだしね」

彼の好意にお礼を言った後、クロア達は改めて長老の屋敷を後にしたのである。

そして、その屋敷から十メートルも行かない内に、息が止まりそうになるくらいの強風が背後から押し寄せて来た。

周囲に捕まるものがないため、いとも容易くクロア達三人は足元をすくわれ、遥か上空に運ばれてしまったのである。

.....

.....

.....

暗転。

日の光さえ差し込まない深い暗黒の世界。心が感じる負の感情。苦しみや悲しみ 果ては、憎しみまで。ここは、そんな感情が支配する世界。これを言葉で表現するのであれば「闇」という単語が最も相応しいと思う。

その力は、我が主が最も受け継ぐ人物だと確信している。

二十台前後の青年は蒼く淡い光を放つ松明を持って、石造りの細い廊下を歩いていった。細いと言っても、大の大人が軽く二人くらいは通れる幅はあるのだが。

そこを、彼はレザーアーマーより頑丈なグローリアという鎧を身につけて歩んでいる。その度に、後ろで一つにまとめた群青色の髪が、しつぽのように揺れ動く。

向かう先は、もちろん我が主がいる闇の広間である。

その目的地に向かうのはいいが、さきほどから生き物の気配や音が全くしない。いや、正確には我が主とそれに従う同士達しかいない、と言った方が正しいか。

自身に見えるのは、淡い炎に照らされる壁と数歩先の景色だけ。それと同じく、自身の耳に聞こえる音は、歩く度に鳴る鎧と弱々しく燃える火のそれ。後は、自身がたてる足音と息遣いなくらいである。

あの方に仕えて、早五百年余りが経とうとする。その時から入念に立てられた計画の一つを、少し前に成功させたばかりだ。その報告をしに主のいる広間へ向かうのだ。

などと思いを巡らせていると、彼の目の前に頑丈な両開きの扉が静かに現れる。

彼は手に持っていた松明を、近くの壁に備え付けられた灯火台に

放りこんだ。ボウツという音を立てて灯火台に淡い蒼の火があがった。

それを見届けた後、青年は片手を持ち上げて石造りの扉をノックする。鈍い音が弱々しく扉の奥へと響く。

と同時に目の前の扉が開き、それに合わせて部屋の中から禍々しいまでの魔力が溢れ出てきた。それはまるで、地獄の底から這い上がってくる化け物に似た印象を受ける。

そんな中、レオは平然と開いた扉の前で一礼を行ってから中に足を踏み入れた。

闇の広間を奥へ進むと、先ほど入ってきた扉は固く閉ざされる。唯一の光源を断たれ、広間は真っ暗になる。いや、ここに立った時点で入口の灯火台に置いた松明は、ほとんど意味を成さなかったのである。あんな弱々しい光源では自分がいる場所まで、まともに届いていない。

そんなことはお構いなしに、その中心でレオは片膝を折って跪くと同時に、自分の回りに僅かな光が灯される。その火は先ほどのものと変わらぬ同じ色だった。

「レオよ。風の精霊とその聖域は、落とせたか？」

「はっ。滞りなく」

静かな問いかけに、低頭したレオは語尾を濁す。

その言葉に違和感を覚えたのか、主人は不機嫌そうに口を開く。

「話せ」

と、短く言葉を発した。

「風を落とす直前、精霊が光の眷属に助けを求めた様子。現在、彼らは風の聖域にある町にて滞在中のこと。……いかが致しますか？」

更に低頭したレオはそう弁解し、ややあつて上目遣いに主人の様子を伺う。途端に、奥で立ち上がる気配がした。しかも、こちらへ近づいてくる。彼は慌てて、視線を石畳の床に戻す。

さっきの問いかけは愚問だったのか？

そう思えるほどの重苦しさで、額に嫌な汗が浮かぶのを感じる。しかし、そう思ったのも束の間。主人はレオの横を通り過ぎたのだ。その瞬間、全身に張りつめていた緊張が解けた気がした。

「レオ」

不意に、主人の声が耳に届く。

「はっ！」

気を取り直して、レオは言葉を返す。

「その件については、お前に任せる。後の始末は、お前が望むようにやれ」

と言葉を残した後、主人の気配は周囲に溶け込むようにして無くなった。

「では、御意のままに」

誰もいなくなった闇の間でレオは立ち上がる。顔には、主人に決して見せない不敵な笑みがあつた。

唐突な覚醒により、クロアは視界を覆い隠していた瞼を勢いよく開ける。と同時に、二人の少女の顔が視界に入った。もちろん、リンとサーラの二人である。

「あ、クロア。良かった。気がついたのね」

「クロアさん、気分が悪いとかないですか？」

「……ああ。俺は平気。心配かけて、ごめん」

思い思いの言葉を掛けてきた彼女達に答える。その後、クロアは片方の腕を持ち上げ、それを自身の額に置く。

暗闇に囚われた深緑の髪を持つ女性。彼女は自分を、風の精霊だと名乗った。その他には、「わたしは巨大になった闇に破れ封印された。だから、あなた方に助けを求めたのです」と、黄緑色をした瞳を悔しそうに閉じる。

そこでクロアの意識は遠のき、今に至るのだ。

さっきの夢は、何だったんだ？

と、思ったのも束の間。今度は、足元の方からノックと共に扉が開く音が耳に届いた。

一斉に向けた視線の先には、白髪の老人と黄土色の髪をした青年がいた。そのどちらもが灰色のローブを身につけ、背中には半透明の羽根が四枚生やしている。そんな彼らは非交友的な態度で、部屋を中心までしか歩み寄らなかつた。

彼らの様子を見る限り、クロア達はあまり歓迎されていないらしい。

それもそのはず。彼らの種族は、妖精族なのだから。

世界には人間族、竜神族、妖精族といった三つの種族（以降、「三種族」と表記）が存在する。そのそれぞれが、自分達の世界を有している。わかりやすく言うなれば、一種族に一つの世界が割り当てられる。

その関係で、他種族間の交流が全くない。だから人によっては、好奇心旺盛に異種族と関わりを持とうとする。が、その逆もまた然りだ。ひどい場合は、種族差別に発展する者もいるだろう。

クロアの住む人間界では、妖精や竜神族は伝説上の生き物として扱っているため、大半の人間族は先ほどの文でいう前者が多いはずだ。

という目の前の現実を踏まえて、現在、クロア達がいるのは人間界ではなく、妖精界にいることになる。

「ようやく、意識を取り戻されたようじゃな。異界の客人よ」

そう言葉を掛ける老人の声音には、親しみとは程遠い感情が含まれていた。そこには、どこか疲れきった様子に、異種族に対する警戒心と嫌悪である。

「はい、お陰さまで。……助けて下さってありがとうございます」

彼らの態度を気にすることなく、クロアは僅かに微笑んでお礼の言葉を返す。が、相手は余計に顔つきを悪くした。

老人の方は、まだ嫌な顔を見せていない（実際には、僅かに見せている）が、その後ろに立つ青年は、あからさまに嫌そうな目つきで睨んでいる。

クロアとしては、種族の違いなんていうのをあまり気にしないのだが、相手の青年に対してはどうも好意を持ってない。

ちらつと隣にいる少女達の方へ視線を向ける。リリンはむっとした表情で、サーラの方は青年ほどではないが僅かに鋭さのある瞳で

彼らを捉えている。

「感謝しなくてよい。今は、わしらの問いに答えてもらおう。それ以外の発言は、極力控えてもらおう」

彼女達の目を確認した上でか、そう告げた老人へクロアは視線を戻す。

彼らが今、自分達に何を聞きたいのか大方予想がつく。おおかた、クロア達がどの種族か、どうやってここに来たのか、何が目的なのか、と言った辺りだろう。

「その前に一つ、聞かせて下さい。ここは、妖精界ですか？」  
「貴様つ、発言を」

後ろに控えた荒々しい口調の青年を老人は片手で制す。一瞬、彼は躊躇ったものの、なんとか剥きだしの感情を抑え込んだようだ。

「あまり、短気を起こさないでくれ」

青年を見やり、そう告げた老人はまたクロアの方に視線を戻す。

「銀髪の少年よ、そなたの質問に答えよう。ここは、風の精霊様が治める世界じゃ。またの名を」

「ちよつと待って下さい」

自分が聞いた問いに答えてもらっている最中に水を差して悪いと思ったが、クロアは彼の発言を止めた。いや、止めずにいられなかった。

今の言葉に、気になる部分があったからだ。それは

「その風の精霊様つて、深緑の髪で黄緑色の瞳をした女性ではないですか？」

瞬間、相手の様子が一変した。

彼らは、相手を警戒する表情から驚愕のそれへと変え、クロアを捉えていた。そしてそれは、リリンとサーラにも同じことが言える。

「お主。どうして、我らの長のお姿を知っている？ あの方は、我々と他の精霊様しか知らないはず……」

心なしか、老人の発する声音は震えていた。

クロアも彼と似たような思いだ。まさか、自分の夢に出てきた女



性が、本当に風の精霊だったとは予想もしていなかったのである。そう思ったのも束の間。一瞬の風と共にいきなりクロアは押し倒された。しかも、誰かが馬乗りになって首を絞めている。

上手く息ができない。そのため、心臓が……いや、全身が空気を求め出している。

「……くうっ！」

苦悶の声を洩らして、クロアは反射的に閉じた目を開ける。

そこには、怒りに溢れた表情で睨む青年がいた。髪が垂れて顔が、やや暗がりになっていたが、彼の顔には怒りがはつきりと現れていた。

この青年の行為を止めるよう促す老人の声、少し離れた所からリリンとサーラの心配する声も聞こえた。

今のクロアには、彼女達の声に答える余裕はない。

自身の体に跨る青年の拘束を解こうと彼の手首を掴み、力を込めて離そうとする。が、上手く力が入らない。それどころか、余計に彼の手に力が籠る。

「貴様、俺達の長を解放しろっ。でなければ、貴様をここで殺す！」実際にそうなりかけている。今、クロアの体は明らかに空気が不足。つまりは酸欠状態に陥っていた。その上、思考も儘ならず目がちかちかする。

これ以上、目を開けていられず、クロアは霞がかった銀灰色の瞳に瞼を被せた。

誰か、助けてっ！

そう強く願った時、ほんのわずかな間だけ自分の魔力がわき上がる。と同時に、胸元で眩い光が唐突に発し拘束された首が解放された。と共に、馬乗りにしていた彼が足元の方へ、半ば強制的に退かされる。

瞬間、止められた呼吸が再開した。

「……ケホッケホッ！」

新鮮な空気を吸った途端、クロアは激しく咳き込む。思わず、体

を横にする。

それを見計らってか、リリンとサーラが慌てた様子で駆け寄って来る。二人ともクロアの背中を撫でたり手を握ったりして心配そうに声を掛けてくる。

「……お、俺は、大丈夫、だから」

半身を起したクロアは言葉につつかえながらも、心配する彼女達にそう告げる。強く首を絞められたせいで、まだ圧迫感が残留し喉もヒリヒリする。

喉元の違和感を残したまま、唐突に退かされた青年がいる方へ視線を向けた。

そこには例の青年の姿はない。代わりに、蒼を強調した和風の服を着た人がいた。髪は服より深い蒼い色だ。背中を覆うくらいありそうな髪を、首の後ろで結んでいる。

と、その人の後姿を観察していれば、向こうもクロアの視線に気がついたのか、こちらを振り向いた。

白磁の肌に整った顔立ちの女性だった。そんな彼女はクロアに儚げな淡い笑みを浮かべ、周りの景色に溶け込むように姿を消してしまった。

その先には、先ほどの青年が壁に背を預け、ぐったりとしている姿がある。すぐに起き上がってこないことから、彼は気を失っているのだと理解した。

「……なるほど。一人は コリング・ストーン 召喚石 を持つておったか」

今し方姿を消した女性のいた場所に目を向け、老人はそう独白する。先ほどとは打って変わって、その声色にはどこか期待するようなものが含まれていた。

「異界の客人よ。我らの長を助けて欲しい」

しばらく逡巡したあと、老人は改まった表情で言葉を発した。その声音は、何の迷いもない力強いものであった。

風の聖域のさる場所に、二人の男性がいた。

一人は、グローリアという鎧を身につけた外見年齢二十歳の青年。後ろで一つにまとめた群青色の髪と、同色の冷酷な瞳が印象的である。

もう一人は、白雪のように真っ白な髪に銀灰色ぎんかいしよくの瞳をした男性だ。こちらもしオと同じグローリアの鎧を身につけた二十歳前半くらいの青年だ。

それにも関わらず、前者と後者とでは、いささか体つきと背丈に差がある。

前者は百七十に届くか否かくらいの身長で、体つきは僅かに華奢なように思えた。

一方、後者の方は百七十後半くらいで肉付きもいい。しかも、鷹のような鋭い目つきなため、視線を合わせるだけで相手に威圧感を与える。

そんな彼らの周囲は　というより、正確には直径三十メートルはある竜巻の中だ。これは、レオが張った結界の一つだ。

そのため、重い灰色に濁った風の壁のせいで、向こうを見ることができない。正直な所、この結界は邪魔で仕方がない。

「おい。一応聞くが、なぜここに結界を張った」

明らかに無意味だろうという意味合いで、ギロツと隣にいるレオに向ける。

当の本人は、自分に向けられた目に動じることなく腕を組んで口を開ける。

「これは、あいつらに対する情けだ。別に気にすることはない」

「ふんっ。どうだかな。その前に、あの方の封印を逃れた奴の存在

を、考慮に入れた方がいいんじゃないのか？」

我々が本当に恐れるのは、唯一絶対の力を持つ月の存在だ。あれは、全ての生物に対して掟を定めた張本人でもある。あれが前線に出てくるとなると、あの方に仕える 「リリング・ストーン」 召喚石 「リリング・ストーン」 といえど、ただでは済まされない。

「それを含めた計画だ。あの方のなさることに、間違いはない」

何の迷いもない声音で述べた後、レオはもう用はないと言わんばかりに彼に背を向ける。と同時に、眼下に黒に近い紫色をした魔法陣を作りだし、そのままそれと共に姿を消した。

結局、レオはそうとしか言わなかったが、一瞥したその目が「失敗すれば、命はないと思え」と訴えかけていた。

「……ふっ。良karう。貴様の望み通り、光の眷属達をこの手で葬って見せようぞ」

一人取り残された彼の顔には、ふてぶてしい表情があつた。

本当に、あの青年を放っておいていいのだろうか？

という疑問を持ちつつ、クロアは背後にリリンとサーラを伴って、なだらかな上り坂になった道を目の前にしていた。

道の両脇は三メートル程の、ごつごつした岩壁で覆われる。それは、風の精霊が封じられた聖域の中心へ続く道だ、と教えられた。

進行方向の先には、天を貫こうかというほどの巨大な竜巻があり、見る者を圧倒させる。

あの後、老人から発せられた言葉は、風の精霊を助けて欲しい、という頼みだった。一度絞殺されかけたクロアにとって、彼の頼みは少々気が引けた。

しかし、クロア達が精霊の住まう聖域に導かれた事や、風の精霊から助けを求める声を聞いた事を考えると、簡単に拒否できるものではなかった。

それを証明するかの様に、一人でも精霊の誰かが封じられたりしたら、今まで取れていた全世界の均衡が崩れる、とも言っていた。ということもあり、クロア達が相談した結果、風の精霊を助けることにしたのである。風の精霊が封印されている場所までの案内人つきで。

老人の住んでいた家以外にも、他にも同じ造りの建物がいくつかあった。

どうやら、クロア達がいた場所は、風の聖域にある小さな村のようだ。彼ら以外にも、何人か家の外に出ているが、その誰もが酷く憔悴した顔つきをしている。

これも、風の精霊が封印された影響なのだろうか？

彼らの表情や様子を見て、クロアはそう思った。すると、背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

クロア達が一斉に後ろを振り返ると、さきほど部屋で色々と説明をしてくれた老人と見知らぬ青年が立っている。

青年の方は目にかかるくらい金髪で、澄み切った青空のような瞳をしていた。身長はクロアより拳一つ分くらい高い。

彼は他の妖精と違って特に異常も無く、ケロリとしていた。

その姿に、クロアは違和感を覚える。

「……異界の客人よ。こちらの方が、あなた方を封印された風の精霊様の元へ案内する」

「案内人のライトだ。よろしく」

老人がその言葉を発した後、金髪の青年は簡単な自己紹介をする。「クロアです。よろしくお願いします」

と、クロアは軽く頭を下げて名乗る。脇に立つリリンもサーラも、クロアに倣って同じように名を言った。

その後、老人はライトに向き直り、申し訳なさそうな表情で口を開く。

「……ライト殿。頼むしか出来ぬワシらを、どうか赦して欲しい」  
と、老人は出発前のライトに非礼を詫びるかの様に頭を下げる。

「お前が謝ることじゃない。責任は、こんな行動を起こしたあいっ  
にある」

横目に彼を捉えたライトは、すうっと目を細めて答えた。

その瞳に、静かな怒りがあるのにクロアは気がついた。

「……あの、ライトさん。あいつって一体、誰なんですか？」

というサーラの問いに、ライトは一言「いずれわかる」と言っ  
て歩み始めた。

風の聖域の外延に位置する村を出発して、一時間くらいが経った頃。

クロア達一行は、少し広めの広場にきた。と言っても、半径二十メートル程の円形になった場所だけである。その中心には石造りの祠のようなものが建ててある。その奥には巨大な竜巻の方へ続く道があった。

「なあ、ライト。あの祠は？」

と、クロアは広場の中心にある建造物について、隣にいるライトに聞いてみる。

祠は、クロアたちのような人間界に住む者にとってあまり馴染みのないものだ。

「あれは、風の精霊に祈りを捧げる祠だ。ここでは基本的に、年長いた者達の祈りが多いな。筋力や体力の衰えがある分、これ以上先に進むのは、体に堪えるんだろう」

これは風の精霊の慈悲かな、とぼやきつつもライトは祠の前で片膝を折り、頭を垂れる。

彼と同じようにとまではいえないが、クロア達もその後ろで両手を合わせて祈りを捧げた。

ほどなくしてその祈りも終わり、再びライトを先頭にクロア達は歩き出した。そこまでは良かったのだが、前方を歩くライトが不意に立ち止ったのである。

訝しく思ったクロアは、彼の方に視線をやる。そこには、ずっと鋭さの増した目つきで前方に視線を送る姿があった。

彼の目先を辿れば、そこには一直線に続く道がある。そこは至って普通で特に不自然な箇所は見当たらない。にもかかわらず、ライトはぶっくらばうに

「違う」

と、さらに目に鋭さを増して一言発する。

「え？ 違うつて何が？」

ライトの発言に困惑しつつも、クロアは正面に続く道と彼の顔を交互に見比べた。

特に地理や視覚的状态などは悪くない。むしろ、良好と言っているくらいである。

それでも彼が違うというのなら、どこかで道を間違えたのか？

「来た道はこれであつて。だが、ここから先の地形が変わっている。……やはり相手は、ある程度体力を削った俺達を殺す気にいるらしい」

後半の部分で、さらりと恐ろしい事を言ってくれる。

そうじゃなくて、問題はここからの道順で視界の端に入る目的地まで行けばいいのだろうか。

というクロアの思考とは別に、ライトは別段悩んだ素振りも見せず、ふと後方を見やる。途端に、彼はわずかに口角を上げる。

「……ふっ。上手く気配を隠すじゃないか。あいつ、よほどお前の事が心配らしい」

「え？」

彼に流し目で見られながら言われたクロアは、そう聞き返しつつも、先ほど彼が見ていた方向へ視線を向ける。

その時、後ろにいたリリンとサーラの二人が、クロアの背後を見るなり軽く目を見張った。

彼女たちの様子に訝しく思うと、目の前にいるリリンに後ろを指さした。それにつられて後ろを振り返ってみる。次いで、驚く。

クロアの前　正確には、ライトの左斜め前に、人が立っていた。しかも、半透明の羽根を広げて。

腰辺りまで伸びた波打つ金色の髪。やや釣り目がちな瞳に、くつきりとした鼻梁と眉。それと、透き通るような白磁の肌を持っている。そのため、クールかつ美しい印象を受ける。

そんな彼女が、いつの間にか（本当は、クロアが後ろを向いた間



にだが）そこにいたのかが不明である。正直な事を言うと、気配や足音もなく来られた身になると心臓に悪いことこの上ない。

などと思うクロアをよそに、目の前にいる彼女はライトに向かつて、淡々と報告を始めた。

「ライト様のご指摘通り、これより先の道が全て改ざんされております。したがってこれより、金色の妖精たるこのわたくしが、我が主とそのお連れ様を目的の地までご案内いたします」

彼女の話が終わると、ライトはクロア達に視線を向ける。

「聞いた通りだ。これから先の道は、こいつが道案内をする」

それでは、半分案内役の意味は無くなるのでは？

と、彼の言葉に疑問を持ってしまふ。それを敏感に読み取ったのか、ライトは

「別段、案内することには変わりはない。こいつは俺の召喚獣だ。

「リング・ストーン」

召喚石 から呼び出したな。こいつの主はこの俺であり、俺がお前たちの案内をする、という名目は果たしている」

「……えーっと、それはつまり、あくまで召喚獣はライトが案内する手段の一つだ、っていうこと？」

「そういうことだ。俺のことに關しては、あまり深く考えるな。ややこしくなるから」

そう言うなり、ライトは自身の召喚獣に目配せをする。と、彼女は主人の意味を悟ったのかコクリと頷く。

「では、私について来てください。くれぐれも、はぐれたりしないでくださいね。でないと、命を落とす事になりますので」

彼女はクロア達に視線を向けると、柔和な笑みで言った。

その後半部分は、絶対に現実にさせたくない不吉なものである。

そんなことを告げた彼女に一抹の不安を覚えつつも、先導し始めた彼女から離れぬようにクロアたちは歩を進めたのである。

クロア達一行が着々と、風の精霊が封印されていると巨大な竜巻を目指す中。

彼らに事の顛末を包み隠さず話した老人は、自身の力が衰えていくのを感じていた。

このままでは、一日と持たずに息絶えることも理解できた。

それでも彼は老いた体に無理をいわせ、集落の中心で巨大な竜巻の方を見上げた。

彼の中には、ある種の希望がある。あの若者たちには少なくとも、何か運命的なものを強く感じた。

特に銀髪の少年を見た時、我らの主たる風の精霊を助けてくれる、そんな気がした。もちろん、そうなるという確証はどこにもない。

だが彼らを見ていると、どうしてもそう思ってしまうのだ。

それに、彼らには『あの方』が付いている。それだけでも、どんなに心強いかわかる。

そこで後ろから誰かの気配を感じた彼は、軽く頭を左右に振って思考を中断した。

「長老殿」

その声振り返ると、不安げに自分を見つめる青年がいた。

彼が目覚めた時は、すでにクロア一行は例の竜巻へ向かった後である。そのため、意識が戻ってから状況を把握するまでに、少しばかり時間がかったようだ。

「今はまだ動かぬ方がよい。主<sup>ぬし</sup>まで命を縮めることになるぞ」

自分にしては、比較的穏やかな声音であった。

それでも目の前の彼は、老人の言葉など気にも留めずに隣までやってきた。そして、同じように巨大な竜巻を見上げる。

「彼らは本当に、我らの望みを叶えてくださるのでしょうか？」

彼の口から告げられた、あの三人に対する疑心。

なぜ彼がここで、そんな事を口にしたのか聞かずともわかる。

皆、不安に駆られているのだ。何の前触れもなしに我らの主が封じられ、見ず知らずの他人が長に導かれた。

よそ者がやって来るだけでも、あまり良い印象を持たないのだ。

それなのに、長に導かれたクロアを一度見た時、不覚にも老人の心に、ある種の希望が生まれたのだ。

だから老人はクロアたち三人を家に招き入れ、長を解放してくれるよう頼んだのである。その結果、彼らは頼みに応じてくれ今に至る。

「もしかすると、彼らは 光の眷属 やもしれぬ」

光の眷属。それは、光属性の精霊 つまり、風・炎・水・月の四属性のことを指し、彼らの加護を最も強く受けた人物のことである。

選ばれる種族と基準は一切不明。だが、人数だけは三人と必ず決まっているそうだ。そのため、一つの種族に固まる場合もあれば、人間族・妖精族・竜神族の中から一人ずつ選ばれることもある。それは確率の問題だから、どうしようもないが。

とにかく、光の眷属 と呼ばれる者達が現れるのは決まって、世界のバランスが崩れる時。それすなわち、精霊の中で唯一闇の力を持つ精霊の全世界掌握。もしくはそれに準ずる何か。それを防ぐために、彼らの存在がある。

そんな意味を含めた独白だったが、隣に立つ青年は律儀に返事をしてくれた。

「本当にそうであれば、大変な事になるでしょうね。他の精霊様方も、同じような目にあっているのでしょうか？」

「おそらく、そうなっておるのじやろう。しかし、今の我らになす術はない。あるとすれば、長と彼らの生還を祈ることくらいじゃ」

といい、老人は両手を胸元で交わらせ僅かに身をかがめる。本当

は、もつと身をかがめるべきなのだか、今の状態では無理がある。それは隣にいる青年も同じなようで、老人と似たような体勢をとっていた。しかし、彼らと長の帰還を祈る気持ちがあることには変わらない。

『彼らと我ら長に、光の精霊達のご加護がありますように』

と、精霊に仕える妖精独特の祈りを捧げる。

願わくば、全世界に平和が訪れると良いのだが……。

次の瞬間、先ほどまで立っていた地面　正確には、直径二十メートル弱に厚さ五センチの岩板　が吹き上げた風の力によって大きく浮上した。

そのため、上から見えない力に無理やり押し付けられるような感覚に、クロアは大いに驚き戸惑った。

現状を言つと、立っていることが出来ない。上昇する力とそれにかかる圧力に、呼吸や立っていることが出来ないのである。

それは隣にいるリリンやサーラも同じで、苦しそうな表情で岩板に両手両足をついてへたり込んでいた。

何の影響も無くけろりと立っているのは、その案内役であるライトと彼に従う召喚獣のみである。

どうすればそんなことが出来るのか聞いてみたいものだが、それは今のクロア達には不可能に等しい。その前に、そんな余裕すら今の彼らには皆無だ。

浮上してざつと十秒くらいだろうか。目の前にあつた巨大な竜巻の上に到達した。と同時に、ほんの数秒間だけ限界まで止めていた呼吸を再開させた。

空気が全身に伝わり、生き帰ったような実感がわいた。それはい

いが次には、自分たちの足場となっていた岩板が傾いた。しかも、巨大な竜巻の中に向かってだ。

何かに捕まるどころか、それすらない状況下で瞬く間に竜巻の中に吸い込まれるように滑り落ちて行く。次いで急降下する。

今まで感じた事のない、強い風に再び呼吸が無理やり妨げられた。その苦痛に一種の恐怖を覚えるが懸命に堪える。

空気を切り裂く音が、うるさく耳に響く。

く、苦しいっ！！

気管を直接圧迫されるような感覚に、吐き気を感じる。目の前から強風で上手く目を開いていられないが、前方に茶色い物体がある。

それが、さきほどまでクロア達が乗っていたものと変わらない岩板だと遅れて気がついた。

このままだと勢いよく、それに衝突して死ぬのは明白である。それを防ぐにも、今のクロア達にはどうしようもない。

その矢先に、視界が半透明な水色のオーラに染まった。途端、落下する速度が著しく減速する。

ど、どうなっているんだ!?

訝しく思い周囲を見渡すと、自分より上空にいるライトと目が合った。

彼の表情には余裕のそれがある。彼が魔法を扱ったのは明白だ。やがて、竜巻の中腹辺りにある岩板の上に着地する。それと同時に、クロア達はその場に座りこむ。呼吸困難と上空からの落下の苦しみから解放される。

「た、助かったあ……」

と、クロアの斜め前にいるリリンは肩で息をしながら、疲れた表情で言葉を漏らす。その隣にいるサーラも同じように呼吸をしつつ何度も首を縦に動かした。

確かにリリンの言う通りである。事実、危うく呼吸困難で死ぬところだった。

しばらく呼吸を繰り返して落ち着きを取り戻した所で、状況を確認しようとクロアは周囲を見渡す。

その中で気がついたのだが、いつの間にかライトとその召喚獣の姿が消えていた。落ちて来た上空を見上げて、彼らの姿は見つからなかった。

もしかして、ここに取り残された?

などと、クロアは即座に思った。目の前にいるリリンは、疲労を訴えた表情で下を向き、肩で息をしている。が、その隣にいるサーラはクロアの後方を鋭い視線で捉えていた。

彼女の様子からして、明らかに別の誰か 敵である可能性は高い。そう思いながら、ゆっくりと後ろを振り返る。

二人の視線の先には、白雪のように真っ白な髪に銀灰色瞳をした男性がいた。身長は百七十後半くらいで、鷹のような鋭い目つきをしていた。しかも、レザーアーマーより防御性能の高いグローリア

という鎧を身につけている。

あなたは、誰なんですか？

そう問いかける必要はなかった。視線の先にいる彼は、明らかな殺気を出していたからだ。

すぐにクロアは立ち上がり、両の手に魔力を纏って魔法剣を呼び出す。

数メートル先には、光の眷属と思しき少年と二人の少女がいる。その内の二人は、こちらに気がついたようだ。

しかも、彼らに放つ殺気をも感じ取ったのか、銀髪の少年はどこから魔法剣を呼び出したのである。

さすがに、その行為には少し驚いた。この世に、まだ魔法剣を扱う人間はいようとは。しかも、彼の場合は二刀流だ。

ふっ。こいつは面白い。

そう思いながら、自身は腰に提げた剣の柄に手をつけ、それを引き抜く。ぎらり、と銀箔の刀身が輝く。柄を両手で持ち、剣を体の前に持つてくる。正眼の構えだ。

相手も二振りの魔法剣を構える。その後ろで、片方の少女がもう一人の少女へ声をかけ、邪魔にならないような場所に移動するのが見えた。

これで、戦う準備は整った。二人の間には何も邪魔するものはない。あるのは、静かに燃える闘志と戦いに対する緊迫感だけである。最初に動いたのは、グローリアの鎧を着た彼の方だ。いきなりトップスピードに近いそれを出して、銀髪の少年との距離を一気に詰める。そして、前に構えた剣を少年の胸元目がけて突き出す。

相手は目を見張り、驚きを隠せないようだ。

もらった！

そう思ったのも束の間。少年の姿が唐突に視界から消えた。と同時に、後ろから首元と背中に二振りの魔法剣が宛がわれる。

そこで、二人の動きは完全に停止する。

だが、彼の心には少なくとも、嬉しさと高揚感がこみ上げていた。死と隣り合わせのこの状況が、なぜかとても心地よい。

「貴様。名は、何と言う」

「クロア。……あんたは？」

少年　クロアは短く答え、そのまま聞き返す。

「俺に名はない」

「どうして？」

今度は、クロアが問いかけた。

「貴様に教える気はない」

「だと思った」

と、彼の返答にクロアはそっけなく答える。

「なら、分かっているな？」

「もちろん」

クロアがそう答えた刹那、二人の戦闘は再開した。

先ほどより切れのある動きで、両者はすばやい攻撃と防御を展開する。十合、二十合、と互いの剣が交差する度に、バチバチッと音をたて火花が散る。と同時に、少しずつ両者の体に生々しい傷が増えていく。浅い傷、深い傷問わずにだ。

それが数十分続き、二人は再び互いの剣を交差させると、後ろに跳躍して間合いを取った。両者ともに肩で息をしている。

誰から見ても、ほぼ互角の戦いだ。

次で決着をつけよう。

自分の体が限界に近いことを感じながら、彼は離れた所でクロアの様子を伺う。相手も自分と同じ状況下に置かれているらしい。

だが、正直こんなに追い詰められるとは思ってもよらなかった。

それは、自分の見極めが甘かったのだろう、と今さらながらに反省する。が、それはもう遅すぎた。

これは、自分らしからぬ失態だ。このままクロアに勝利し『あの方』の元へ戻っても、どのみちあの方に殺されるのは目に見えてい



る。しかし、どうせ死ぬなら、目の前の敵を倒して死のう、と思った。

次の攻撃が最後だ！

そう覚悟を決めて、彼は大きく深呼吸をし、剣を構えなおす。クロアも同じような動作に移る。そして、ダツと両者同時に走り出す。目まぐるしい速さで、相手が接近する。剣先を前に向ける。狙うは、クロアの心臓。そこさえ突き刺せば、もう自分の勝利は確定したも同然だ。

相手が自分の攻撃圏内に入る。刹那、彼は力強く踏み込み、手に持った剣を前に押し出す。それと、クロアが魔法剣を横に薙ぐ動作は同時である。

「……ごほっ！」

しばらく近距離で睨みあった後、最初に吐血し倒れ伏したのはグロリアの鎧を着た彼の方だった。

彼の胸元には、クロアが魔法剣で一閃した傷跡がある。そこと口からの吐血により、足元に血だまりが広がる。

クロア自身の体も限界なようで、そのまま仰向けに倒れた。その瞬間に全身が激痛を襲ったが、今はその痛みは少し和らいでいる。なぜなら、彼の視界には雲一つない真つ青な空があるからだ。

ああ。俺はまだ、生きてる……。

そう実感すると同時に、相手が使っていた剣が上空から落ち、自分と相手の間にある岩板に突き刺さる。

最後の一戦の時、自分の心臓を貫きかけた相手の剣を片方の魔法剣で、上空に弾いたのだ。それで、死に至る傷を負わずに済んだのだ。

「クロア！」

「クロアさん！」

遠くの方から、リリンとサーラが自分と呼ぶ声が聞こえる。

次いで、二人の顔がクロアを心配そうに覗きこむ。

霞みがかかる視界と思考で二人の姿を確認したら、安心できたのかそのまま意識を失った。

次に目を覚ました先には、見知らぬ天井があった。しかも、今はベッドの上に寝かされており、戦いで出来た傷の痛みはだいぶん引いている。

俺は、どのくらい眠っていたのだろうか。それに、リリンとサーラはどこに？

と、まだはつきり思考のまま、クロアは疑問に思う。それでも、悲鳴をあげる体を起こそうとすると、何かがお腹の上でもぞもぞと動く。

それに驚き、一度は体をびくつかせる。が、すぐに手を動かしてお腹の上にいる何かを掴む。途端に、それは大人しくなった。それをいいことに、そのままその何かを顔の方へ近づける。

固くザラザラした感触に、いささか疑問を感じる。

可愛らしい鳴き声を上げて、掛け布団とクロアの間から顔を出したのは、深緑の鱗を持った小さな生き物だった。その鱗は、以前見たサーラの召喚獣のそれとどこか似ている。

実物を見たことはないが、これは明らかに竜の子供であった。

「……もしかして、お前。竜の、子供か？」

久しぶりに言葉を発したおかげせいか、喉にだいぶ負担がかかるが、それ以外は特に何ともない。喉の渇きも感じられない。

眠っている内に、誰かが水を飲ませてくれたのかな？

と思いつつ、目の前にいる竜の子供を眺める。黄緑色の大きく可愛らしい瞳が印象的だ。

その子は、小首を傾げながらクロアを眼下から見上げている。かと思えば、そろそろと彼に顔を近づけ、その匂いを嗅ぐ。そして、彼が安全だと分かると、小さな舌でペロペロと頬を舐め始めた。

それが、たまらなくこそばゆい。

「……ちよつと、くすぐりたいよ」

半ば傷の痛みを堪えながら笑い、その子の頭を優しく撫でる。すると、その子は、たちまち気持ち良さに目を細めて喉を鳴らし、今度は頬をすりすりしてくる。

なぜだか良く分からないが、この子はクロアに対して好意を持っているように思えてならない。

しかも、クロアが本物の竜を見たのは、これが初めてだ。そして

それは、この竜の子供にとっても同じことではないのだろうか  
と疑問に思う。

そんな中、部屋に来訪者を知らせる音が聞こえる。と同時に、扉  
が静かに開く。おそらくベッドで眠るクロアを気遣ってなのだろう。  
それから、できるだけ足音を立てずに部屋に入ってくる。

気配は三つ。その内の二つは、言わずとも分かる。リリンとサー  
ラのそれだ。

が、そのまえに、つい先ほどまで頼ずりをしていた竜の子供は、  
三人が入室すると同時に、クロアの胸元でピタッと大人しくなる。

「大丈夫。クロア、まだ眠ってるみたい……」

「……けど、リリンさん。クロアさんが目を覚ますまで、待ってお  
いた方が……」

という二人の会話が、クロアの耳に届く。

もう一つの気配の方は、未だに沈黙を保っている。だが時折、心  
配するようにこちらの様子を伺うような視線を感じられる。

どこがまだ、眠っているんだろうか？

と、リリンの発言に訝しく思いつつ、クロアは小さく息を吸い込  
み言葉を発する。

「俺なら、もうとつくに起きてるよ。リリン、サーラ」

「……えっ。嘘!？」

「……クロアさん!？」

部屋の入り口付近で、こそこそと話す彼女達に声をかけると、そ  
んな言葉が帰ってきた。

それと同時に、リリンとサーラは足早にクロアの元へ駆け寄り、  
それぞれ顔をのぞかせる。

二人とも、思ったより元気そうな表情をしていた。

「クロア、気分はどう?」

「怪我の具合は、どうですか?」

と、彼女達はそれぞれ思ったことを口にする。しかも、リリンな  
んかは双眸が涙ぐんでいる。余程心配していたんだろう。

「うん。気分はいいけど、体はちよつと痛いな」

そうクロアは告げると、胸元で大人しくしていた竜の子供が柔らかい鳴き声を上げて訴えかけてくる。しかし、それだけでクロアには何を言いたいのか理解できないでいた。

それを解決してくれたのが、サーラだった。

「……あの、クロアさん。その子、自分がクロアさんの上に乗っていて大丈夫かと聞いています」

「え？ そうなのか？」

安心した表情で告げる彼女の言葉聞き、クロアは目の前にいる竜の子供に確認をするとコクコクと頷いてくれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3146w/>

---

月の掟と共に

2011年10月10日03時23分発行